門真市埋蔵文化財発掘調査報告書　第８集

元　町　遺　跡

元町中央公園整備事業に伴う発掘調査報告書

２００３年３月

門真市教育委員会

元　町　遺　跡

元町中央公園整備事業に伴う発掘調査報告書

２００３年3月

門真市教育委員会

序　　文

平成12年２月、市内普賢寺遺跡において、埴輪を伴う古墳（普賢寺古墳）が発見されました。古墳の発見は門真市では初めてのことで、埴輪も大阪府下では出土例の少ない盾持人埴輪をはじめ、多くの埴輪が出土し、大きな成果をあげることができました。

それから２年８ヵ月後の平成14年10月、公園整備事業に伴う元町遺跡の発掘調査で、今度は古墳時代の建物跡が発掘され、元町遺跡が古墳時代の集落跡であることが確認されました。

今回の発掘調査では、５世紀後半頃の土器が多く出土しており、６世紀前半の普賢寺古墳より少し時期が遡りますが、元町遺跡の集落と普賢寺古墳とが密接な関係にあることがわかりました。今回の発掘調査の成果は、門真市における古墳時代の歴史に新たな１ページを加えることとなり、門真の古墳時代が、また少し具体性を帯びてきたように思います。

このように、発掘調査は少しずつですが、着実に歴史を解き明かしてまいります。市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の皆様をはじめ、多くの方に理解され親しみをもたれるよう保存・活用されることを望みつつ、本書がその役割の一端を担えれば幸いに存じます。

最後に、このたびの発掘調査に際し、ご理解と多大な協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

門真市教育委員会

教育長　下浦克明

例　　言

1．本書は、元町中央公園整備事業に伴い、門真市都市整備部地域整備課より依頼を受けた門真市教育委員会が、門真市元町1135番地他で実施した元町遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査面積は180㎡であり、調査費用は全額原因者が負担した。

3．本調査にかかる文化財保護法の規定に基づく通知書等は、次のとおり提出済みである。

○法57条の３にかかる通知書　平成14年５月17日付け　門教史第５号

○法58条の２にかかる通知書　平成14年６月25日付け　門教史第５号

4．現地調査は、平成14年10月２日に着手し、平成14年10月23日まで、実働14日で終了した。

発掘調査は、門真市教育委員会市史編さん課技術職員宇治原靖泰が担当した。

5．遺物整理・報告書作成作業は平成15年３月31日まで実施した。

出土遺物の整理・報告書の作成は宇治原靖泰、船築紀子（奈良大学文化財学科四回生）、南田尚紀（関西大学史学地理学科三回生）が行った。

6．現地調査及び遺物の写真撮影は宇治原靖泰、トレースは宇治原靖泰、船築紀子が行った。

7．発掘調査業務は、門真建設工業株式会社及び株式会社丸十工業に委託した。

8．調査の過程で、次の方々から貴重なご教示を賜った。記して感謝の意を申し上げる。

水野正好（奈良大学）　福永信雄（東大阪市教育委員会）　野島稔（四條畷市教育委員会）　林田善也（守口市教育委員会）

9．本調査にかかわる遺物・写真・カラースライド・実測図等は、門真市教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構実測図・本文中の標高はすべてT.P.（T.P.±０m＝東京湾中等潮位を基準とする。）で表記した。

2．埴輪・土師器・瓦の断面は原則として白抜き、須恵器は黒塗りで表した。

3．遺物実測図の番号と図版の番号は対応する。

本　文　目　次

序文
例言　凡例
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の概要 …… 5
　第１節　調査区の設定 …… 5
　第２節　基本層序 …… 5
　第３節　調査日誌抄録 …… 6
第４章　元町遺跡の調査 …… 6
　第１節　中央調査区の調査 …… 6
　第２節　東調査区の調査 …… 9
　第３節　西調査区の調査 …… 9
第５章　出土遺物 …… 9
　第１節　遺物の概要 …… 9
　第２節　中央調査区出土遺物 …… 9
　第３節　東調査区出土遺物 …… 15
　第４節　西調査区出土遺物 …… 15
第６章　調査のまとめ …… 17

挿　図　目　次

図１　調査位置図 …… 1
図２　門真市の位置 …… 2
図３　門真市の文化財分布図 …… 4
図４　調査地区配置図 …… 5
図５　基本層序柱状図 …… 5
図６　中央調査区全体図 …… 6
図７　建物１平面・断面図 …… 7
図８　土坑１平面・断面図 …… 8

図９　中央調査区出土遺物１ …… 10
図10　中央調査区出土遺物２ …… 11
図11　中央調査区出土遺物３ …… 12
図12　中央調査区出土遺物４ …… 13
図13　中央調査区出土遺物５ …… 14
図14　中央調査区出土遺物６ …… 14
図15　東・西調査区出土遺物 …… 16
図16　西調査区出土遺物 …… 17

図　版　目　次

図版１　調査地周辺
図版２　中央調査区全景（北から）
図版３　中央調査区建物１
図版４　中央調査区土坑１
図版５　中央調査区土坑１遺物出土状況(1)
図版６　中央調査区土坑１遺物出土状況(2)
図版７　中央調査区土坑１遺物出土状況(3)
図版８　中央調査区柱穴２・井戸１
図版９　中央調査区完掘状況（南から）
図版10　西調査区西１・２区
図版11　西調査区西３区
図版12　西調査区西２・３区遺物出土状況
図版13　東調査区東１区
図版14　東調査区東２区
図版15　東調査区東３・４区完掘状況
図版16　中央調査区出土遺物(1)
図版17　中央調査区出土遺物(2)
図版18　中央調査区出土遺物(3)
図版19　中央調査区出土遺物(4)
図版20　中央調査区出土遺物(5)
図版21　中央調査区出土遺物(6)
図版22　東・西調査区出土遺物
図版23　西・中央調査区出土遺物

第１章　調査に至る経過

門真市元町1135番地他において公園造成工事が計画され、平成14年５月17日、門真市長より埋蔵文化財発掘の通知が提出されたため、門真市都市整備部地域整備課と協議を行い、試掘調査を実施した。

試掘調査により、古墳時代の遺物包含層と遺構・遺物が良好な状態で存在することが明らかとなり、工事が遺物包含層に影響を及ぼす場合は発掘調査が必要となった。

今回の調査対象地は公園として整備されるため、工事による掘削が遺物包含層に影響を及ぼす可能性は少ないと判断されたが、貯水槽と下水道の掘削部分については、工事が遺物包含層に重大な影響があると予想されたため、発掘調査を実施することになった。但し、貯水槽が計画された場所については、事情により調査位置をずらすことになった。現地調査は、平成14年10月２日から同年10月23日まで、約180㎡を対象に実施した。掘削は地表より約70cmを機械で、以後人力で最大110cmまで掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

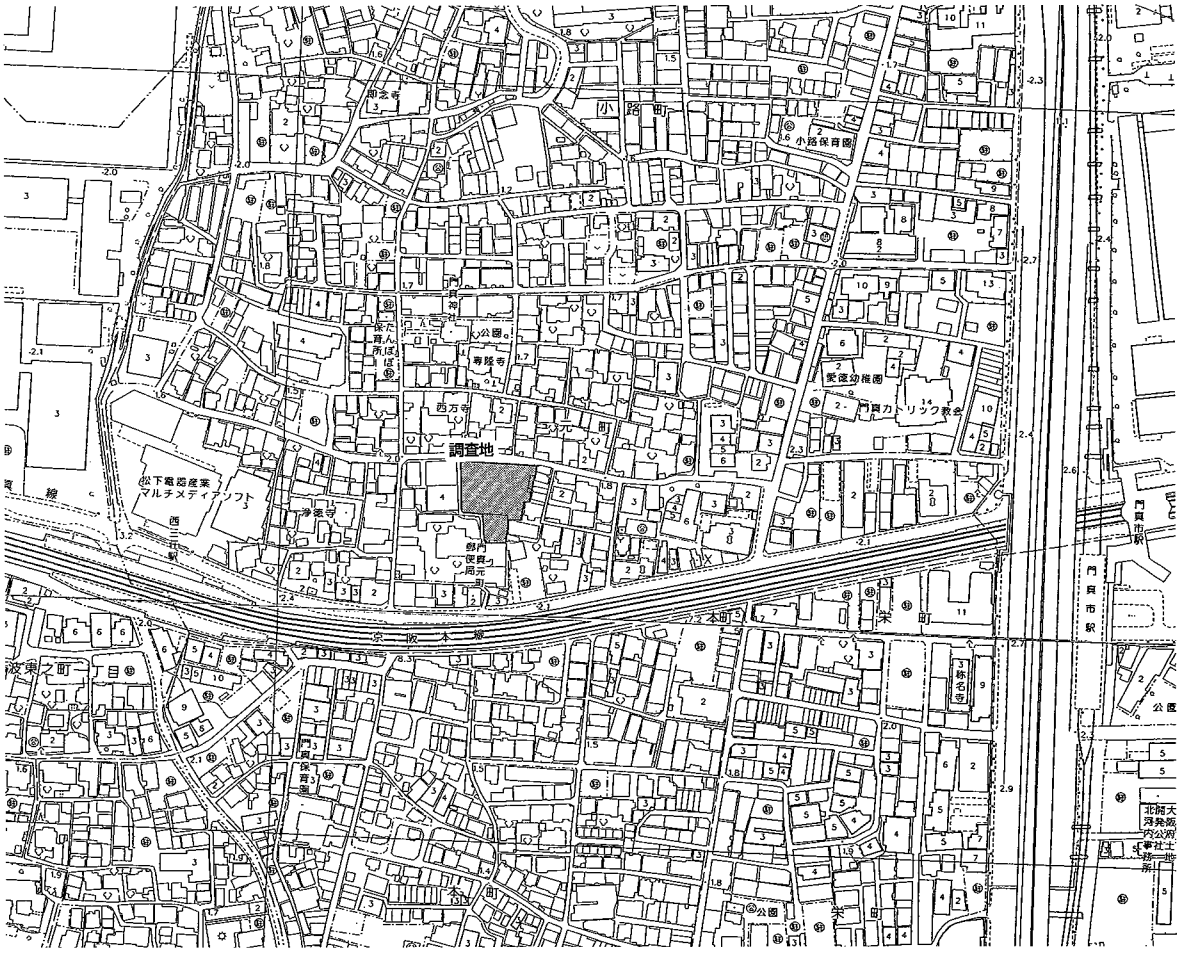


図１　調査位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

元町遺跡は、大阪府門真市元町及び小路町に所在する古墳時代から近世にかけての複合遺跡である。今回の第１次調査が行われるまでは小規模な立会・試掘調査が行われたのみで、遺跡の性格はほとんどつかめていなかった。

元町遺跡は、京阪電車西三荘駅と門真市駅間の線路の北側の旧村落と商店街、新興の住宅、マンション等が混在する市街地に立地し、門真市域では比較的高い海抜２ｍ前後の平坦地となっているが、実際に現地を歩いてみると、遺跡の中央北側が高く、そこから南、東、西方向に下るごく緩やかな傾斜を感じ取ることができる。また行政的には門真市の北西部にあたる。

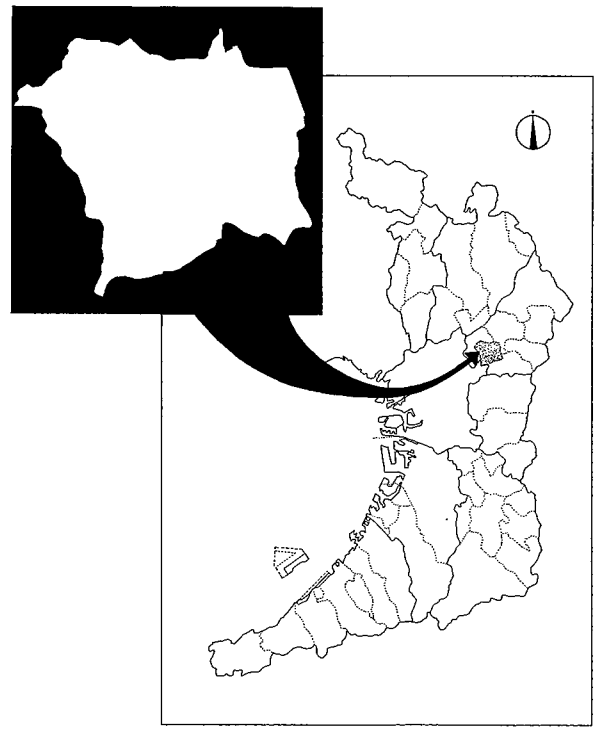


図２　門真市の位置

元町遺跡の西側には西三荘水路、東側には古川が南流する。西三荘水路は、門真市の北部で古川から派生し、守口・門真の市境を流れ南流していく、人の手によって整えられた水路である。

古川は、現在寝屋川市の平野部に源流が認められ、門真市域を南流して、やがて大東市で寝屋川に合流し大阪湾に至るが、淀川に堤防が築かれる以前は淀川の水が古川に流れ込んでいたと考えられ、門真市域で急角度に流路方向が変化していることから、これも人の手が加わっているものと考えられる。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

市域において旧石器時代の資料は現在のところ知られていない。全域が厚い沖積層に覆われているためである。大東市深野南のボーリングデータは、ウルム氷期最盛期の河内平野深野地域には湿地が広がっていたこと、気候は現在より寒冷だったことを示しており（梶山・市原　1972)、門真市域もほぼ同様の環境であったと考えることができる。

縄文時代

縄文時代前期（約7000～6000年前）になると状況は一変する。「縄文海進」により急激に海面が上昇し、旧石器時代に陸地であった門真市域は、「河内湾」の出現により水没する。河内湾は、門真市域はもとより、北は高槻市、南は八尾市、東は生駒山麓に達していたようである。

約5000～4000年前になると沿岸砂州が発達し、門真市域でも「水走沿岸州」により、一部で離水（陸化）が始まっていたと考えられる（梶山・市原　1985)。

門真市大字門真と守口市八雲東町に所在の西三荘・八雲東遺跡では、縄文時代後期（北白川上層式Ⅲ期・約3500年前）の深鉢と浅鉢が出土している。しかし当時は定住生活がすでに始まっていたというより、乾期

に離水するわずかな陸地を訪れ、魚・貝・水鳥などを獲る期節的な生活をしていたのではないかと考えられている（宇治原・植田　1993）。

弥生時代

次に市域に生活の痕跡が認められるのは、弥生時代前期（約2300年前）になる。

この頃の市域の状況は、河内湾の陸化がさらに進んで、汽水の「河内潟」となっていた（梶山・市原 1985）。水走沿岸州は離水が進み、細長く延びた砂州上に門真市域の集落が形成されたと考えられる。市域における弥生時代の遺跡は、西三荘・普賢寺・古川・大和田遺跡が主なものである。

西三荘遺跡は、中期前半から後期の土器が出土し、遺構は確認されていないが、土器の量は多い。

普賢寺遺跡は、前期後半から中期の遺跡で、昭和60年の調査で弥生前期後半の壷が遺構に伴って発掘されている（宇治原　1990）。また昭和59年の調査では、弥生中期の土器とともに石包丁が出土している（福田 1984）。

古川遺跡は、前期後半から後期の遺跡で、弥生時代全期間継続するのは市域ではここだけである。また平成10年の調査で、前期後半から中期初頭に築造されたと考えられる方形周溝墓10基が市内で初めて確認され、弥生時代の前期から集落が成立していたことが確認された（宇治原ほか　1999）。

大和田遺跡は、昭和38年に銅鐸三個が京阪電車大和田駅改修工事中に、地下２ｍの砂の中より発見されたことで有名である。銅鐸はいずれも弥生時代中期に鋳造された小型で扁平なつくりのもので、四区袈裟襷文と無文のものがある（三木　1977）。

三ツ島遺跡では、昭和37年に弥生時代後期の土器とともに、くり舟が製作途中の状態で発掘されている（上田ほか　1963）。

古墳時代

古墳時代の河内は、巨大前方後円墳をはじめ古墳が多く造られた地域であったが、門真市域においては最近まで古墳が確認されていなかった。しかし平成12年の普賢寺遺跡の調査で、６世紀前半頃に築造された普賢寺古墳が発見された。この古墳は直径約30ｍの葺石を伴わない円墳と考えられ、盾持人埴輪をはじめ多数の埴輪が出土した（宇治原ほか　2000）。今回調査の元町遺跡は５世紀後半から６世紀初め頃の資料が出土しており、１km余りしか離れていない普賢寺古墳との関係が注目される。

また、市域には記紀の記録に残るわが国最古の堤防工事で築かれた「茨田堤」と伝えられる堤防の遺構が唯一、宮野町・常称寺町に残り、一部が大阪府指定の史跡になっている。

古代

市域の奈良・平安時代の遺跡は、西三荘・元町・橋波口・本町・普賢寺・古川・宮野遺跡で、遺物が出土しているが出土量は少ない。

主な遺構は、橋波口遺跡の須恵器の甕を棺に転用した奈良時代の墓と、曲物を井筒にした奈良から平安時代の井戸であるが、ここからは平安時代の祭祀用とみられる大量の土器・桃核等が出土している（宇治原 1992）。普賢寺遺跡では伊勢の斎宮跡出土のものとそっくりな顔を描いた墨書土器が出土し（宇治原　1991）、今回の元町遺跡の調査では、門真市域で初めて奈良時代前期の軒丸瓦が出土した。また堂山町黄梅寺に飛鳥時代の小金銅仏が伝世されていることが明らかにされたことから（松田ほか　2000、松田　2001）、斎宮茨田真手御宿所が黄梅寺付近にあったという伝承が単なる伝承ではなく、やや現実味を帯びてきたことも注目される。

【引用・参考文献】
上田宏範ほか 1963「門真市三ツ島遺跡発掘調査概報」『大阪市立博物館報』 2 大阪市立博物館
宇治原靖泰 1990「普賢寺遺跡発掘調査概要」 1 門真市教育委員会
宇治原靖泰 1991「普賢寺遺跡発掘調査概要」 2 門真市教育委員会
宇治原靖泰 1992「門真市橋波口遺跡発掘調査概要」門真市教育委員会
宇治原靖泰・植田正幸 1993「西三荘・八雲東遺跡発掘調査概要」門真市教育委員会・守口市教育委員会
宇治原靖泰・角南聡一郎 1999「古川遺跡」門真市教育委員会
宇治原靖泰・松田朝由・船築紀子 2000「普賢寺古墳」門真市教育委員会
梶山彦太郎・市原実 1972「大阪平野の発達史」『地質学論集』 7
梶山彦太郎・市原実 1985『続大阪平野発達史』古文物学研究会
福田英人 1984『普賢寺遺跡発掘調査現地説明会パンフレット』大阪府教育委員会
松田誠一郎・岩間香・谷直樹・東野良平 2000『門真市史』第4巻第6章第3節 門真市
松田妙子 2001「古代の誕生仏 単独像篇 ― 大阪・黄梅寺蔵誕生釈迦仏を巡って ―」『仏教藝術』257 毎日新聞社
三木文雄 1977「終末期の扁平小形銅鐸に就いて」『國學院雑誌』78-9 国学院大学

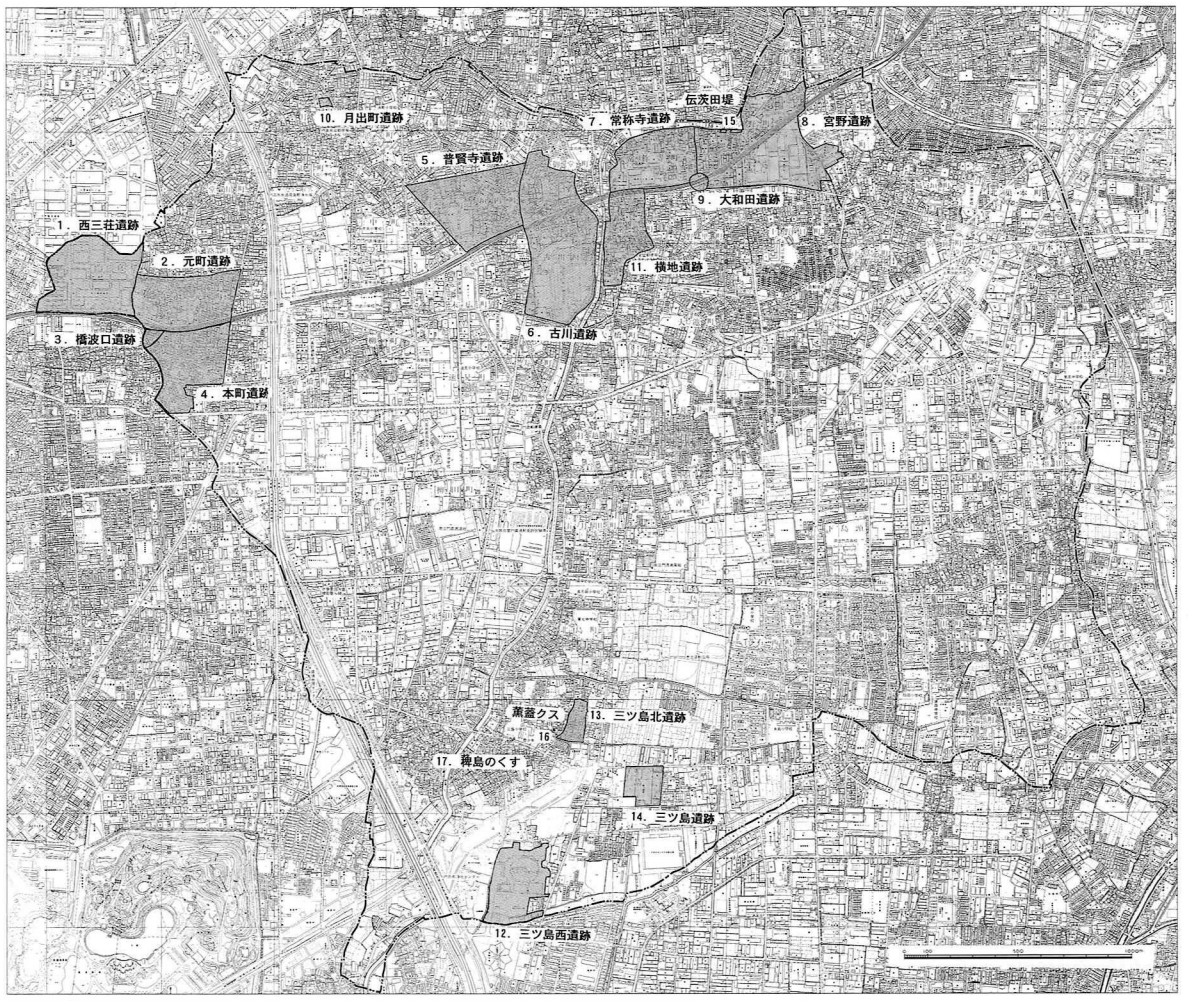


図3 門真市の文化財分布図

第３章　調査の概要

第１節　調査区の設定

今回発掘調査の対象となる公園予定地全体の面積は1,882㎡であるが、工事により遺跡に重大な影響が及ぶところは、貯水槽埋設部分と下水管敷設部分であるので、貯水槽と下水道の工事で掘削する部分約180㎡が発掘調査の対象となった。発掘調査では、貯水槽部分を中央調査区、西端の下水部分を西調査区、東端の下水部分を東調査区とし、さらに東・西調査区は、北から３ないし４区に細分した。

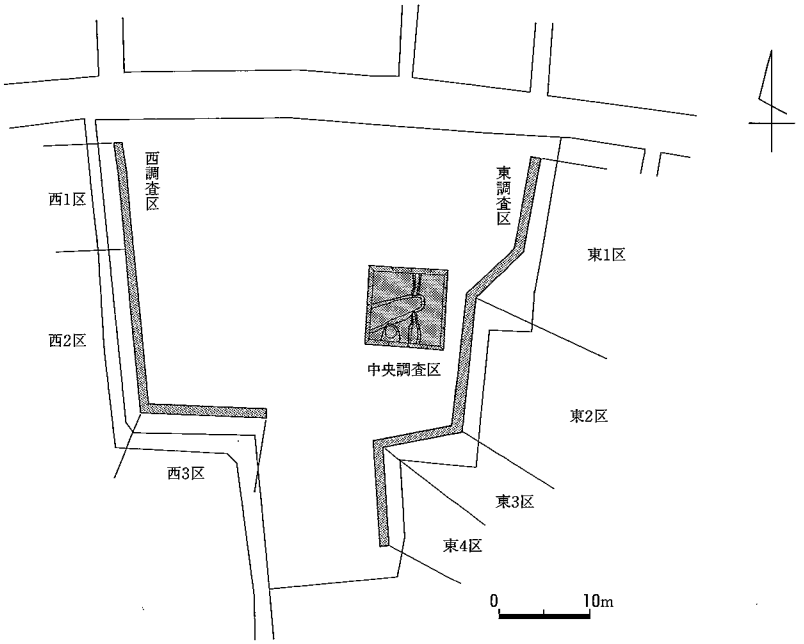


図４　調査地区配置図

第２節　基本層序

発掘調査は現地表面から約70cmを機械掘削し、以後は人力で包含層を約30cm掘り下げた。中央調査区の基本層序は、上から現代盛土、近現代耕土・床土、第１層：灰色中砂（HueN 4/0マンガンを多く含む）、第２層：灰黄褐色粘土（Hue10YR 4/2）、第３層：灰オリーブ色粘土（Hue5Y 6/2）である。

中央調査区では第１層はほぼ無遺物層であるが、第２層は古墳時代の包含層である。また古墳時代の須恵器・土師器を含んでおり、その下面が古墳時代の遺構面となる。第３層は、地山である。

西調査区は中央調査区の基本層序にほぼ当てはまる堆積をしているが、若干の違いが認められる。具体的には現代盛土、近現代耕土・床土までは同様であるが、第１層：灰オリーブ色粘質土（Hue5Y 6/2）、第２層：暗灰黄色粘質土（Hue2.5Y 5/2）、第３層：灰色砂混じり粘土（Hue5Y 4/1）となる。調査区の南西側からは、埴輪とやや古い型式の須恵器が出土しており、調査範囲外に古墳の存在が推定できる。

東調査区は、北側の一部に古墳時代及び中世の包含層が残存していたが、南に向かうにつれ水分を多く含む砂と粘土の堆積になり、湿地の様相を帯びてくる。また近世以降の撹乱により土層が分断されており、堆積の状況はわかりにくくなっている。

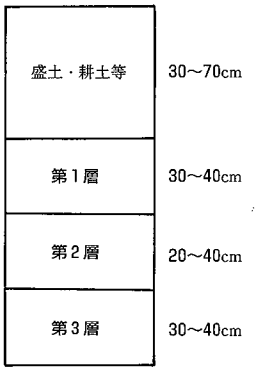


図５　基本層序柱状図

第３節　調査日誌抄録

平成14年10月２日(水)　はれ　　中央調査区の機械掘削を始める。

10月８日(火)　あめ　　中央調査区で古墳時代の土坑（土坑１）を確認。午前中で作業中止。

10月９日(水)　はれ　　中央調査区、土坑の実測図作成。西調査区の機械掘削を始める。

10月10日(木)　はれ　　中央調査区で掘立柱建物跡を確認する。

10月11日(金)　はれ　　中央調査区の遺物出土状況の全体撮影。

10月15日(火)　はれ　　東調査区の掘削を始める。

10月23日(水)　はれ　　現地調査終了。

第４章　元町遺跡の調査

第１節　中央調査区の調査

公園予定地の中央やや東よりのところに９×９ｍの調査区を決定し、掘削を行なうことにしたが、当初は北西方向に少し離れたところが調査対象であった。しかし、調査対象のほぼ全体がコンクリートの廃材で埋められており、包含層等は消滅していたため、掘削位置を移動して調査することになった。

調査は、機械掘削後すぐに北から南に流れる溝（溝１）を確認した。最大幅2.0ｍを測り、検出部分の南端で急に拡がりをみせ、深さも0.9ｍと深くなっている。遺物は古墳時代から近世まで出土したが、円筒埴輪と奈良時代前期の軒丸瓦の出土が注目される。

第１層上面で井戸状の落ち込み（井戸１）を検出したが、地山の粘土層をわずかばかり掘ったところで止まっていた。直径約0.9ｍ、深さ0.9ｍを測る。底近くから須恵器瓶子が出土した。

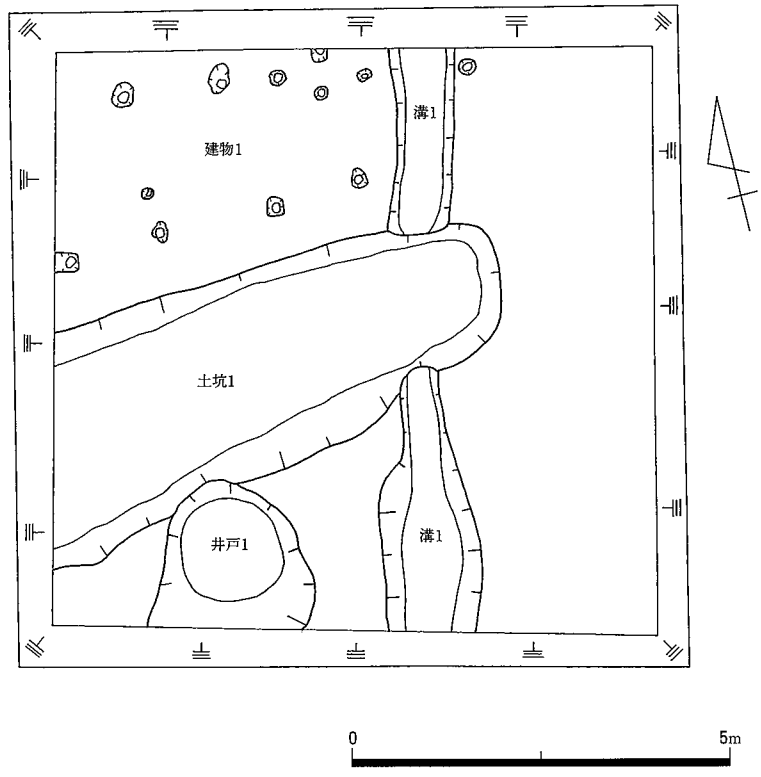


図６　中央調査区全体図

第２層は古墳時代の包含層で、この下面から古墳時代の遺構が認められる。５世紀後半頃の須恵器、土師器が出土している。遺構は、掘立柱建物跡と建物に並行する長円形の土坑を検出した。

建物１（図７　図版３）

調査区の北西側で検出された。東西３間以上×南北１間以上で、西側と東側は調査区外に広がるため全容は不明であるが、総柱の建物になる可能性が高い。柱間寸法は、東西方向1.2～1.5m間隔でばらつきがあり短いのに対し、南北方向では1.8m間隔である。また建物は磁北に対し直角に建てられており、方位を意識した計画性を考えることができる。柱穴の形態は、隅丸方形を呈し、平均して一辺が約50cm、検出面からの深さは約30cmを測る。柱痕は直径約20cmである。柱穴２では柱受けの板材（礎板）を３枚確認した。柱穴の埋土は灰色粘土、柱痕は黒色粘土が基本である。古墳時代（５世紀後半）のものと考えられる。遺物は須恵器、土師器がわずかに見られる。

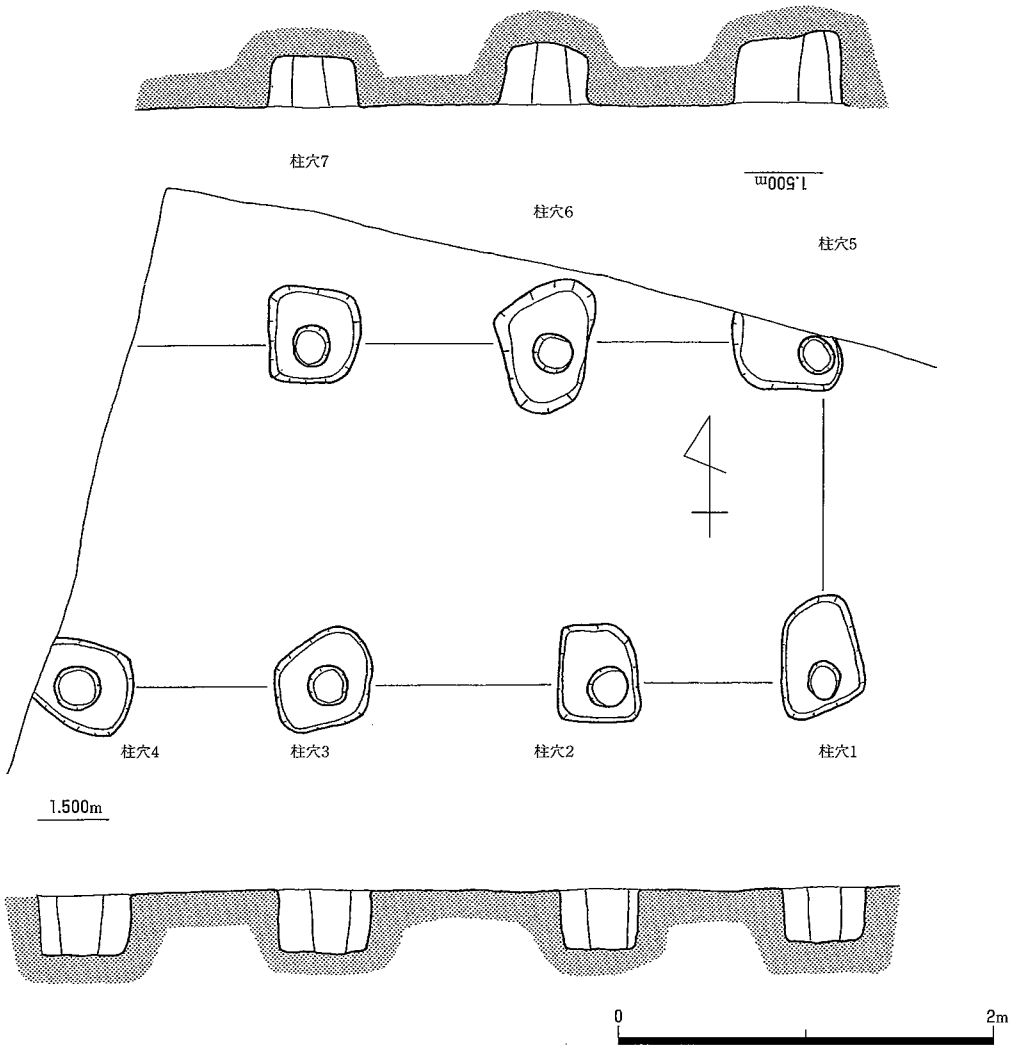


図７　建物１平面・断面図

土坑１（図８　図版４～７）

検出当初は溝と考えていたが、調査終了時に土坑と確認したものである。調査区のやや南寄りで検出され、掘立柱建物に並行する。長円形で、検出面での長さ7.4m（一部が調査区外に延びる）、最大幅2.8m、深さ0.4

mを測る。埋土は黒色炭混じり粘土が基本で、土器を多く含んでいる。5世紀後半頃の須恵器、土師器が多数出土し、なかでも製塩土器の多さが注目される。

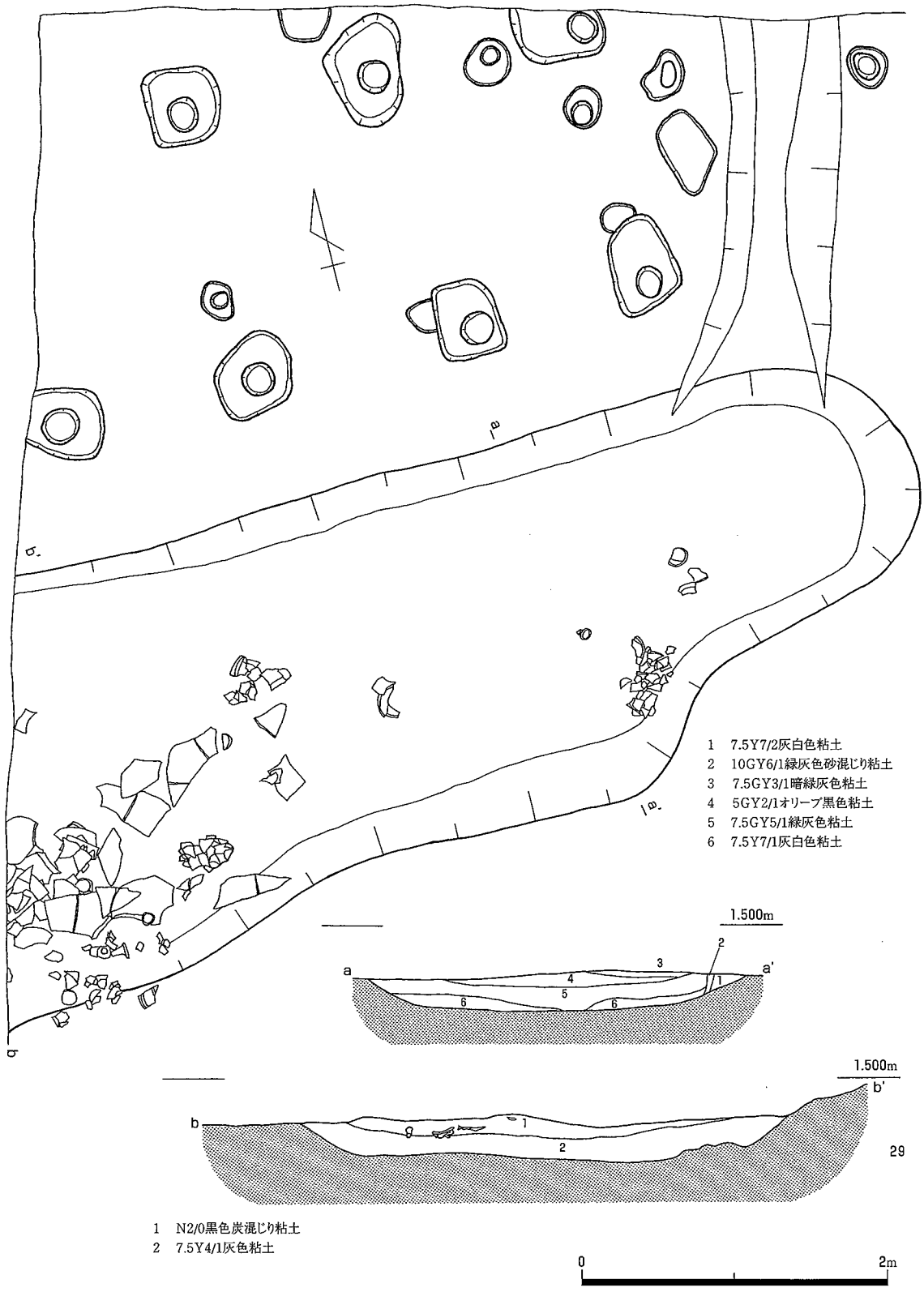


図8　土坑1平面・断面図

第２節　東調査区の調査

東調査区は、下水管が埋設される部分を調査した。公園予定地の北東隅から土地の形状に沿い、東１区から東４区を設定し、調査を長さ55.8m、幅１ｍで実施した。

東１区は、撹乱があるものの、第１・２層が明瞭に残存していた上に中世土器を含む包含層も確認できた。しかし、北から10mのところで長さ13mにわたり撹乱が入り、その先は土層の堆積の状況が大きく変わる。撹乱のため土層の切りあい関係は確認し得ないが、南東方向に地盤が下がっており、東３・４区では湿地状の堆積をみせる。遺構は確認されず、遺物は東１区で古墳時代と中世の土器がわずかに出土したほかは、撹乱から近世の陶磁器が出土したにとどまる。

第３節　西調査区の調査

西調査区は、ここも下水管が埋設される部分を調査した。公園予定地の北西隅から土地の形状に沿い、西１区から西３区を設定した。調査は長さ34.3m、幅１ｍで行った。

西調査区の層序は、中央調査区とほぼ同じ状況を示すが、ここでは第１・２層がより明瞭に連続し、古墳時代の包含層が相当広範囲に及ぶことを示している。

遺物の出土状況などから遺構の存在は明らかであったが、遺構の性格を明確にできなかった。西１・２区に比べ西３区は遺物の出土量が格段に多くなるほか、今回調査の出土資料の中ではやや古い型式の須恵器が確認されている。また埴輪片が出土していることから、調査区外に古墳が埋まっている可能性が考えられる。

第５章　出土遺物

第１節　遺物の概要

遺物は、古墳時代（５世紀後半頃）の土器が大半を占める。須恵器、土師器とも器種が豊富で、資料の保存状態も良好であった。門真市域でこれだけ多くの古墳時代の資料が出土した例はなく貴重である。

中央調査区では、第２層および土坑１から古墳時代の遺物が多く出土したが、比較的保存状態のよい遺物は、出土状況を記録し取り上げた。その他、小片等の遺物は、出土した調査区及び層位を記録した。

調査区の中央を北から南に流れる溝（溝１）は近世の水路で、古墳時代から近世に至る遺物が出土し、なかでも奈良時代前期の軒丸瓦片が特に注目される。奈良時代以前の瓦の出土は市域で初めてである。

西調査区は、中央調査区と似通った遺物の出土状況を示しており、とりわけ西３区は古墳時代の遺物の出土量が多く、保存状態も良好で、中央調査区よりやや古い様相の遺物が見られる。また埴輪の出土も見られる。

東調査区は、北よりの一部に古墳時代から中世の遺物包含層が残存するが、東２区から湿地と撹乱が多くを占めるため遺物の量は少なくなっている。

第２節　中央調査区出土遺物（図９～14　図版16～21・23）

１～10は須恵器の杯身である。口径は10.2～12.0cm、器高4.4～5.5cm、**１・２**はほぼ完形の資料である。**３・４・９・10**は第２層：灰黄褐色粘土（Hue10YR 4/2）、**１・２・５～８**は土坑１から出土した。立上がりは直立するものと、内傾するものがある。口縁端部は**８・10**が面、**２～７・９**は段あるいは凹面をなして

内傾しており、1は丸くおさめる。口縁端部が段や面をなすものも、作りは甘く、浅い沈線がめぐることなどで、わずかにその痕跡を残すものが大半である。底部の外面は、2が約2／3、4・5・9・10が約1／2

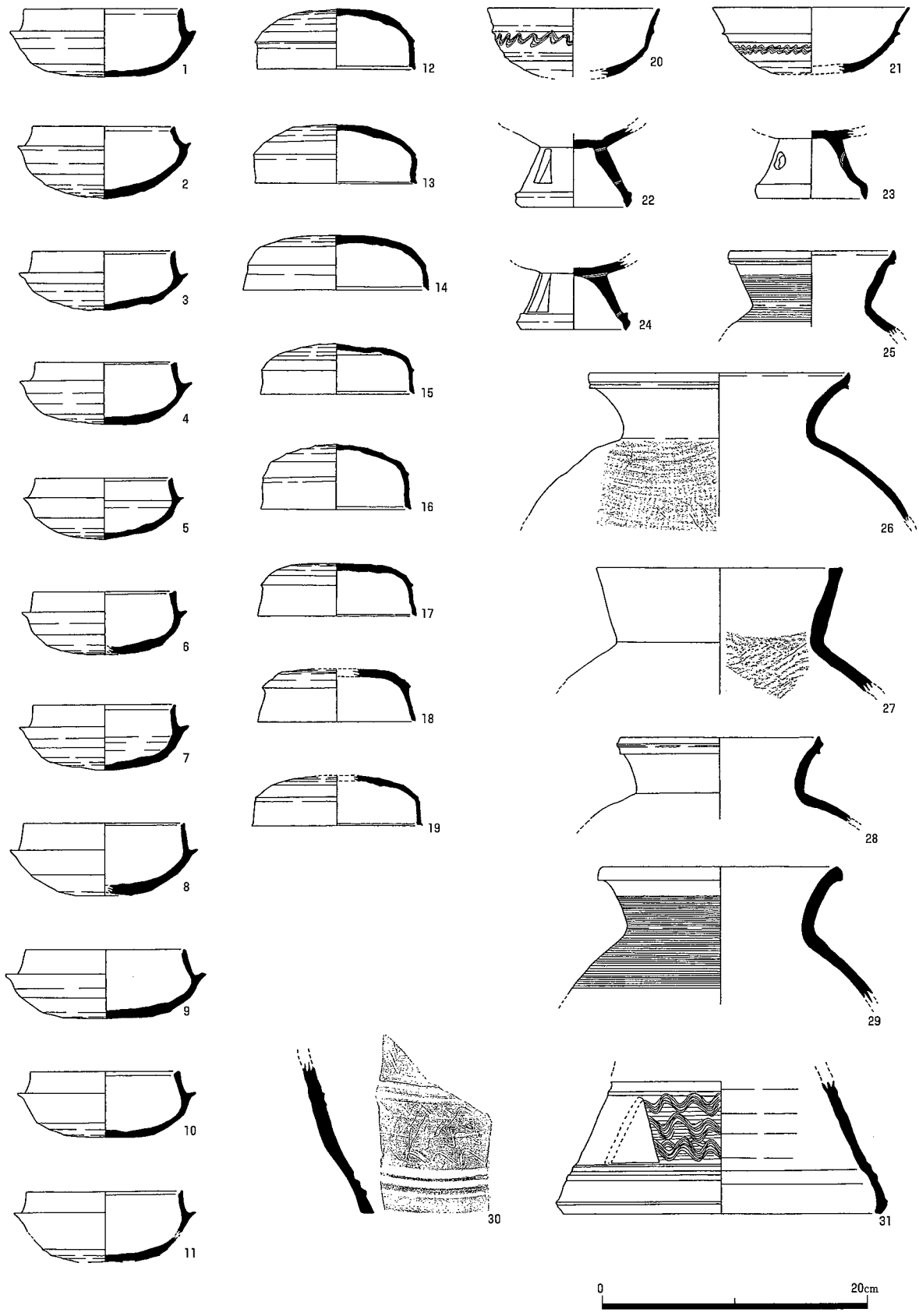


図9　中央調査区出土遺物1

を時計回りに、また、**1・3・6**が約２／３、**7・8**が約１／２を反時計回りにヘラケズリ調整している。**1・4・9**は自然釉がかかる。

12～19は須恵器の杯蓋である。口径は11.4～14.0cm、器高3.8～4.9cm、**14**はほぼ完形の資料である。**17**は第２層、**12～15・18・19**は土坑１から出土した。天井部と口縁部の境は**12・15～18**が稜をなし、**13・14・19**が凹線状を呈する。口縁端部はすべて段あるいは凹面をなしている。天井部の外面は**12・14・16・18・19**が約２／３、**13**が約１／２を時計回りに、また、**15・17**が約２／３、**13**が約１／２を反時計回りにヘラケズリ調整している。**16**は自然釉がかかる。

11は有蓋高杯である。杯部のみ残存する。口径は11.6cm、残存器高5.2cm、底部には脚のはがれた痕跡がドーナツ状に残り、その外側に透かしの位置と幅を示したものか、並行に２本のヘラ記号がある。底部外面の約１／２を反時計回りにヘラケズリするが、脚の影響を受ける部分はヨコナデ調整のままである。土坑１から出土した。

20・21は無蓋高杯である。口径が各々13.0cm、14.8cmで突帯の直下やその間を波状文で飾る。器面の調整は、外面を右回りのヘラケズリ調整をしている。**20**の内面と**21**の口縁部の一部に自然釉がかかる。

22～24は高杯の脚部で、各々の底径は9.0cm、9.0cm、9.2cmである。下方に折り曲げた裾端部直上に突帯をめぐらすが、**24**では甘くなっている。**22・23**は不均等に三方向に長方形のスカシ孔を設け、**24**は不均等に円形のスカシ孔を三方向に設けるが、穿孔が稚拙で、変形や不十分な貫通が見られる。**22**は全体にうっすらと煤が付着しており、二次的に火を受けていると見られる。三点とも土坑１から出土した。

30・31は器台である。いずれも土坑１から出土した。**30**は裾部に凹線、甘い突帯をめぐらせ、三角形スカシ孔を配し、間を波状文で飾る。**31**は底径44.0cm、裾部に突帯をめぐらせ、三角形スカシ孔を配し、間を波状文で飾る。

25～29・32は甕である。口径は各々12.4cm、19.1cm、18.6cm、15.0cm、17.7cmあり、**32**は口縁部を欠失するが最大径が約110cmの大型の甕である。口縁端部は、**27**は断面長方形にまっすぐ伸び、**25・26・28**は口縁端部直下に凹線と鋭い突帯をめぐらせている。**29**は長方形で外傾し、外面が肥厚している。体部外面は**25・29**がカキメ調整を施す。内面はナデ調整を施すが、**25・32**以外は当て具痕が残る。**27・28・32**には自然釉がかかる。また、**28**は赤灰色で堅緻であり、**29**は灰白色を呈し、焼成はやや悪い。**26～28・32**は土坑１から出土、**25・29**は第２層から出土した。

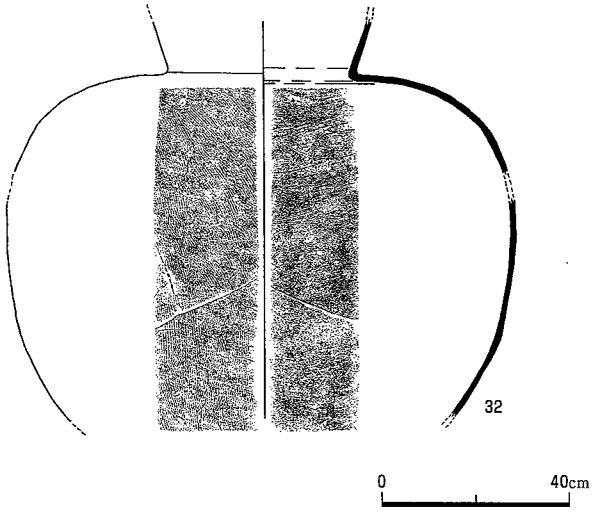


図10　中央調査区出土遺物２

33～42は土師器甕である。**41・42**は小型の甕で、**41**は口径が12.8cmあり、口縁端部は小さくつまみ上げている。**42**は最大幅12.8cm、残存高12.3cmあり、体部外面は縦方向のハケ調整、内面は板状工具によるナデと上半にユビオサエとナデで、粘土紐の接合痕が残る。体部外面には黒斑が見られる。長胴ぎみの体部をもつ**33～35**は口径が13.6cm、14.1cm、13.4cmあり、口縁部は外湾気味に立上がり、口縁端部は**33・34**が外反

ぎみに丸く仕上げ、35はつまみ上げ気味に丸く仕上げている。口縁部外面の調整は33・34がヨコハケ、35はヨコナデを施す。内面は33がヨコハケの後ヨコナデを施し、34・35はヨコナデを施している。体部外面の調整はいずれもハケである。内面はヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げている。いずれも生駒西麓産のものとみられる。外面には煤が付着している。36〜40は中型の甕である。口径は16.2〜21.6cmあり、口縁端部はつまみ上げている。体部外面の調整はいずれもハケで、内面はユビオサエとナデが施されている。38・39は第2層、その他は土坑1から出土した。

43・44は杯で、口径は43が11.4cm、44が11.0cmあり、43の器高は4.9cmである。口縁部はヨコナデにより外反し、口縁端部は丸く仕上げている。体部外面はハケ調整、内面は板状工具によるナデが施されている。43は土坑1から出土した。

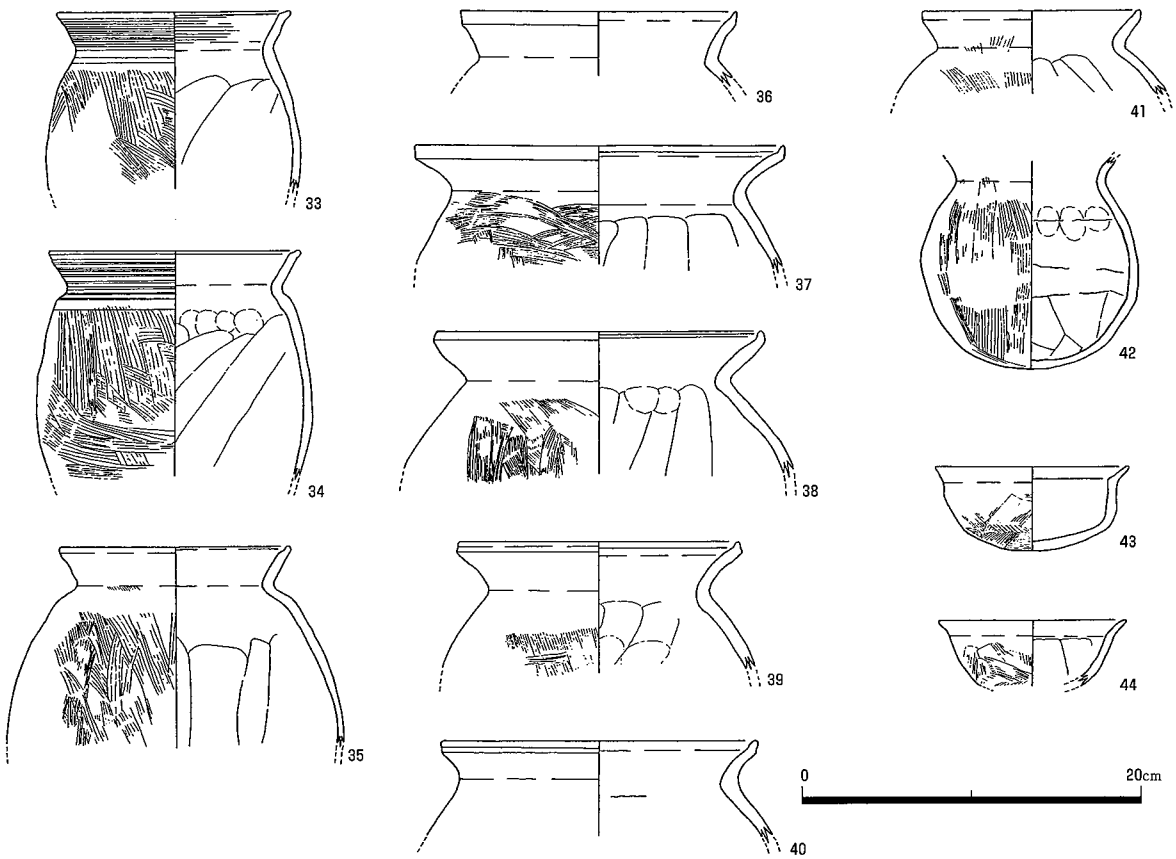


図11　中央調査区出土遺物3

45〜47は高杯の脚部で、45の底径は10.9cmである。45・46は内外面ともヨコナデとナデで調整している。土坑1から出土した。

48は椀で、ほぼ完形の資料である。口径は11.4cm、器高は7.9cmである。口縁部は内湾気味に立上がり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。器壁が厚く、約1.0cmある。内面及び口縁部に煤が付着する。

49は甑（こしき）で、口径は28.4cmある。口縁部は体部から直線的に伸び、口縁端部は浅い凹面をなしている。体部外面はハケ調整、内面はヘラケズリの後、口縁端部から10cm余りを横方向にヘラミガキしている。口縁部に煤が付着している。50は甑の底で、煤が付着している。

51は鍋で、口径は26.2cmある。口縁端部はつまみ上げている。体部には、把手を貼り付けた跡が残る。体部外面はやや粗いハケ調整、内面は横方向のヘラミガキ調整を施している。**52～55**は甑や鍋の把手である。

56は砥石である。四面に研ぎ痕があり、うち二面には線条の研ぎ痕が見られる。最大長6.9cm、最大幅6.5cm、最大厚3.8cmを測る。凝灰岩製。第２層出土。

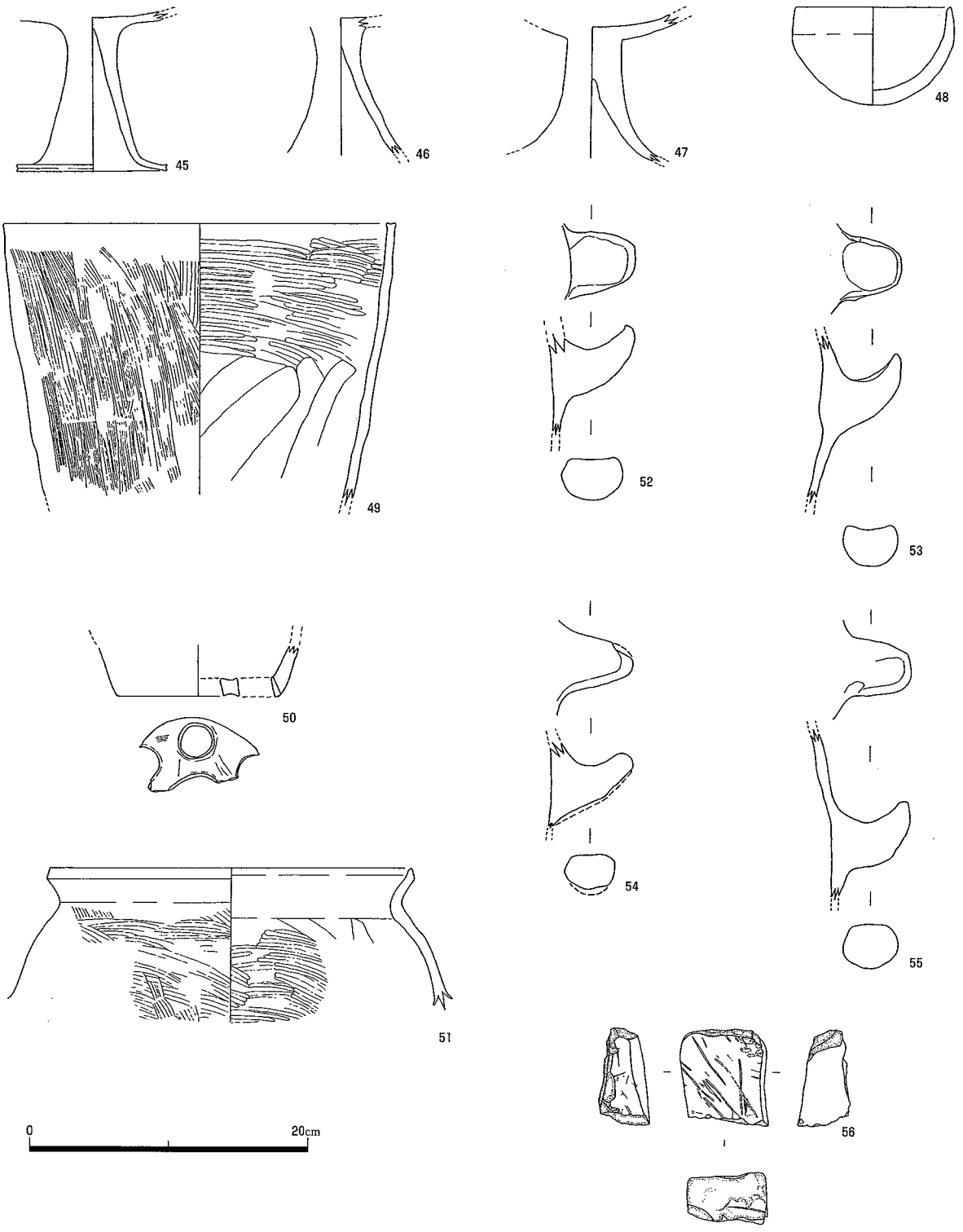


図12　中央調査区出土遺物４

製塩土器は破片を含め400点以上が出土している。丸底で器面調整にナデを施すものが全体の約７割を占め、丸底で器面の整形が平行タタキを施すものが約２割、器形が椀形を呈するものが約１割となっている。色調は赤褐色を呈するものと、暗灰～灰白色を呈するものがあるが、椀形のものは赤褐色を呈している。丸底で器面調整にナデを施す**64・69・74・75**の口径は3.6～4.0cm、器高は**64**が7.6cmである。丸底で器面の整形が平行タタキを施す**59・61・62・65・68・69・76・77**は口径が4.2～6.5cm、器高は**59・62**が8.3cm、6.8cmである。**59**は完形の資料である。椀形の**57**は口径が10.9cmである。**58・61・66・77**は第２層から出土し、その他は土坑１から出土した。

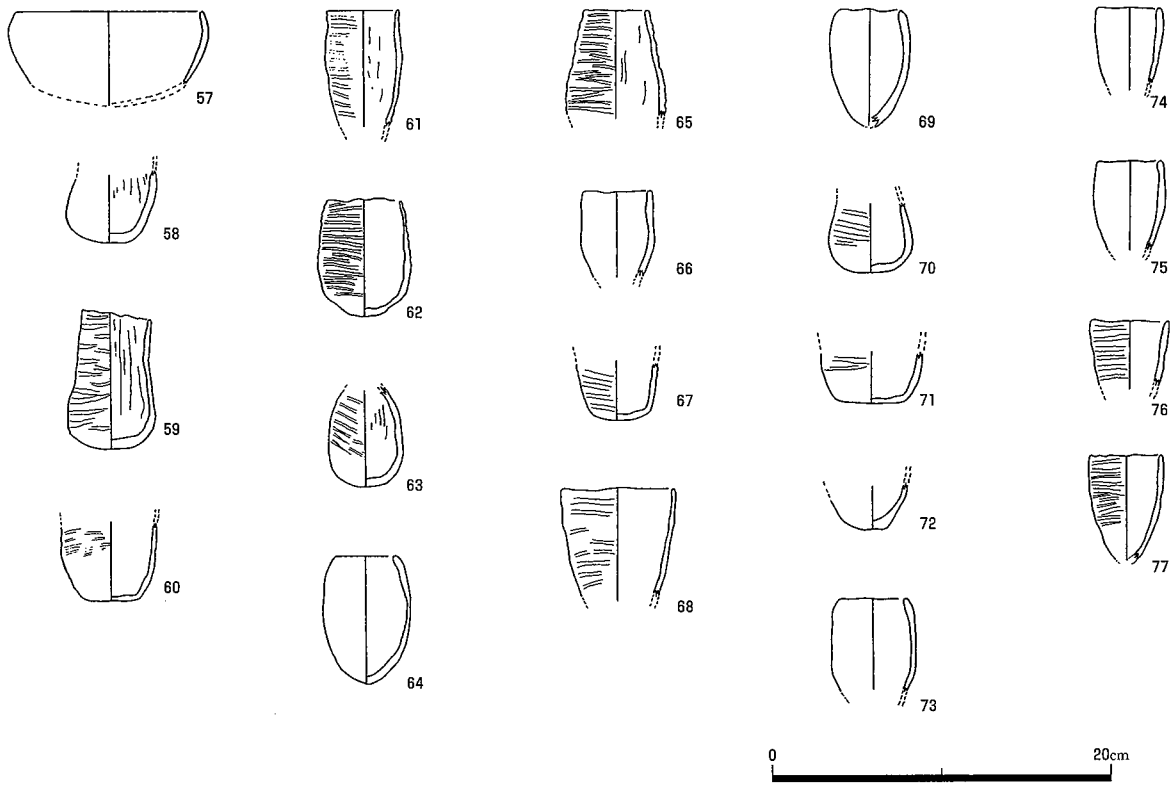


図13　中央調査区出土遺物５

その他の遺構の遺物

78は円筒埴輪である。小片で、タガは断面が台形状を呈し、内面にユビオサエが認められる。外面の調整にはタテハケが施されている。溝１出土。

79は軒丸瓦の瓦当部分である。小片であるが、瓦当文様は八弁複弁蓮華文で間弁を伴う。中房は欠失する。外縁には内区模様に合わせた彫り込みがある。瓦当部の折損したところには丸瓦の跡が残る。瓦当部分に煤が大量に付着していた。焼成は堅緻である。溝１から出土した。

80は須恵器の瓶子である。糸切り底で、乾燥前に棒状のものを抜いた跡が内面に残る。底径3.6cm、残存の器高7.4cmである。井戸１から出土した。

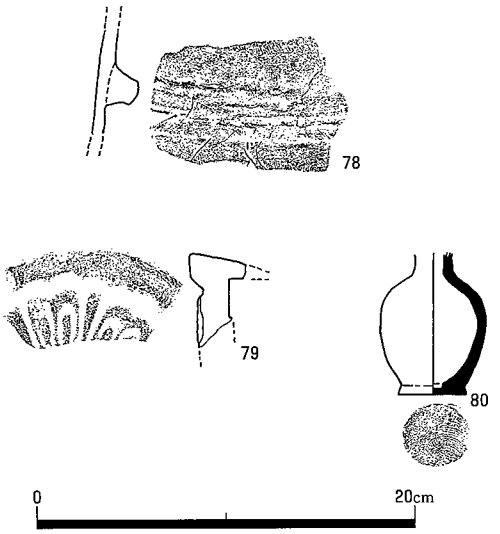


図14　中央調査区出土遺物６

第３節　東調査区出土遺物（図15　図版22）

91は須恵器の杯身である。口径は10.6cm、器高は5.1cmである。立上がりはやや内傾し、口縁端部は外反ぎみに丸く仕上げる。底部の外面は、約１／２を反時計回りにヘラケズリ調整している。焼成は甘く、灰白色を呈する。

第４節　西調査区出土遺物（図15・16　図版22・23）

81は須恵器の杯蓋で、口径12.9cm、器高4.4cmで、約80％が残存する。西３区の第２層からの出土である。天井部は平坦でカキメ調整し、口縁部の境は鋭い稜をなし、口縁端部は段をなしている。天井部の外面は自然釉がかかる。

82・83は須恵器の杯身である。口径は**82**が12.3cm、**83**が11.6cm、器高は5.4cmと4.9cmである。いずれも西１区の第２層からの出土である。立上がりはやや内傾し、口縁端部は段をなすものの作りは甘く、浅い沈線がめぐることで、わずかにその痕跡を残している。底部の外面は、**82**が約２／３を反時計回りにヘラケズリ調整し、**83**が約１／２をヘラケズリ調整するが、自然釉がかかり、回転方向の確認はできない。

84は大型の瑳（はそう）である。西３区の第２層からの出土である。最大径16.0cmで、残存高12.0cmあり、頸部より上を欠失する他は完全な形で残る。体部は肩が張り、最大径は上位にあり、その直上に櫛描波状文をめぐらす。体部外面上半はナデ、下半はカキメ調整しており、底部はタタキメが残る。肩の一部と底部内面に自然釉がかかる。

85～90は甕である。口径は**85**が22.6cm、**86**が20.5cm、**87**が20.0cm、**88**が19.2cm、であり、**89・90**は頸部及び体部である。口縁端部は**85・86・88**は口縁端部直下に凹線と突帯をめぐらせているが、**88**は凹線、突帯とも鋭いが、**85・86**は甘くなっており、**87**では凹線が省略され、長方形で外傾し、外面が肥厚した状態になっている。体部外面は**90**に格子タタキと平行タタキが見られるほか、**89**は頸部に凹線と突帯をめぐらせ、間を波状文で飾る。**87・88**はカキメ調整が見られる。内面はナデ調整を施すが、**89・90**にはわずかに当て具痕が残る。**85・86**には自然釉がかかる。**85・87**は西１区から出土、**86・88～90**は西３区から出土し、すべて第２層からの出土である。

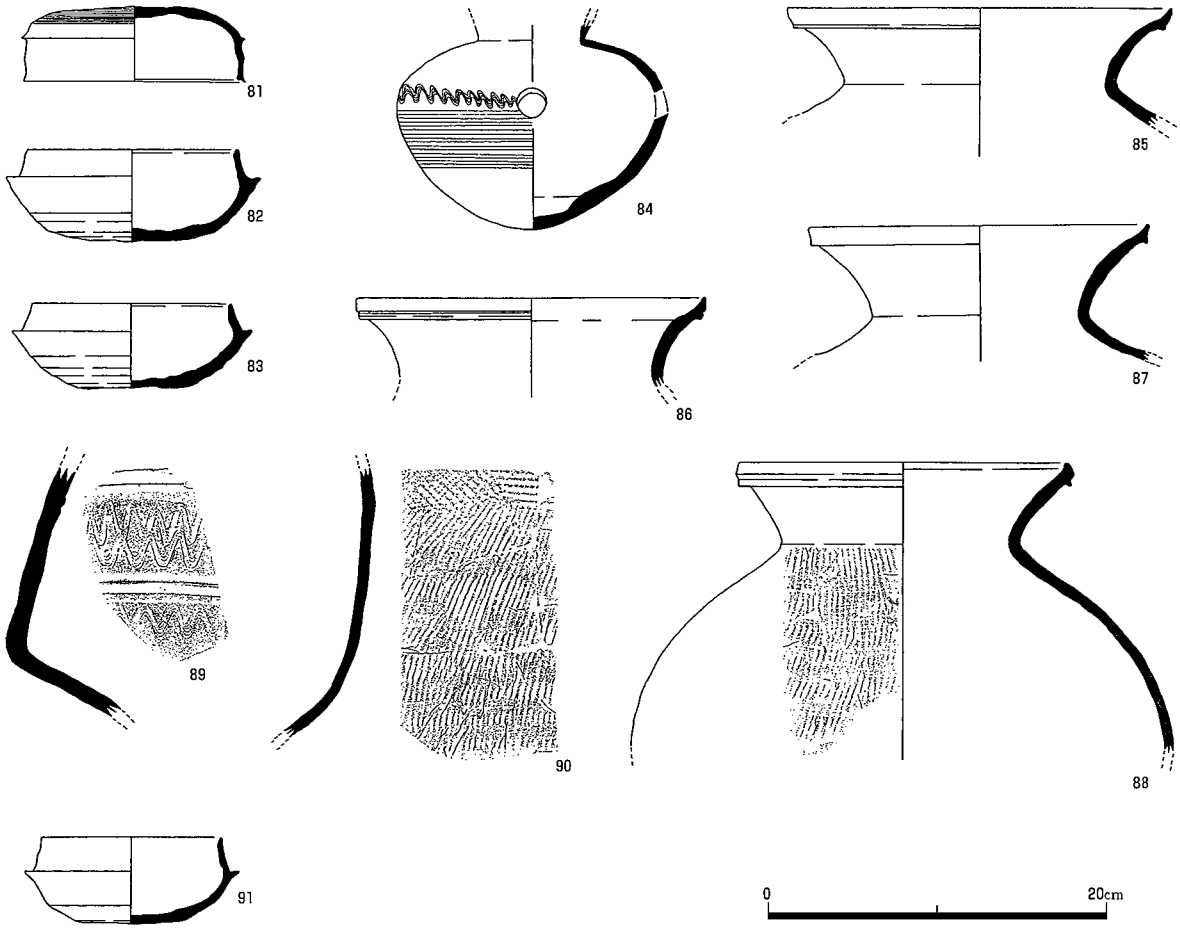


図15　東・西調査区出土遺物

92～95は土師器の甕である。**92**は小型の甕で、口径が11.4cmあり、口縁端部は丸く仕上げている。体部外面は縦方向のハケ調整、内面はユビオサエとナデが施される。西１区第２層から出土した。長胴ぎみの体部をもつ**93**は口径が13.7cmあり、口縁部は外湾気味に立上がり、口縁端部は丸く仕上げている。口縁部の調整は内外面ともヨコナデを施す。体部外面の調整はハケである。内面はヘラケズリを施している。生駒西麓産のものとみられる。西１区第２層から出土した。**94**は球形の体部をもつ甕である。口径は34.1cm、口縁部は外反し、口縁端部は内面に凹線を残しながら面をなしている。体部外面の調整はハケで、内面はナデが施されている。体部外面には煤が付着している。西１区第２層から出土した。

96は高杯の脚部で、底径は11.7cmである。内外面ともヨコナデとナデで調整している。

97は形象埴輪の破片である。一部にハケメが残る。焼成は良好である。西３区第２層から出土した。

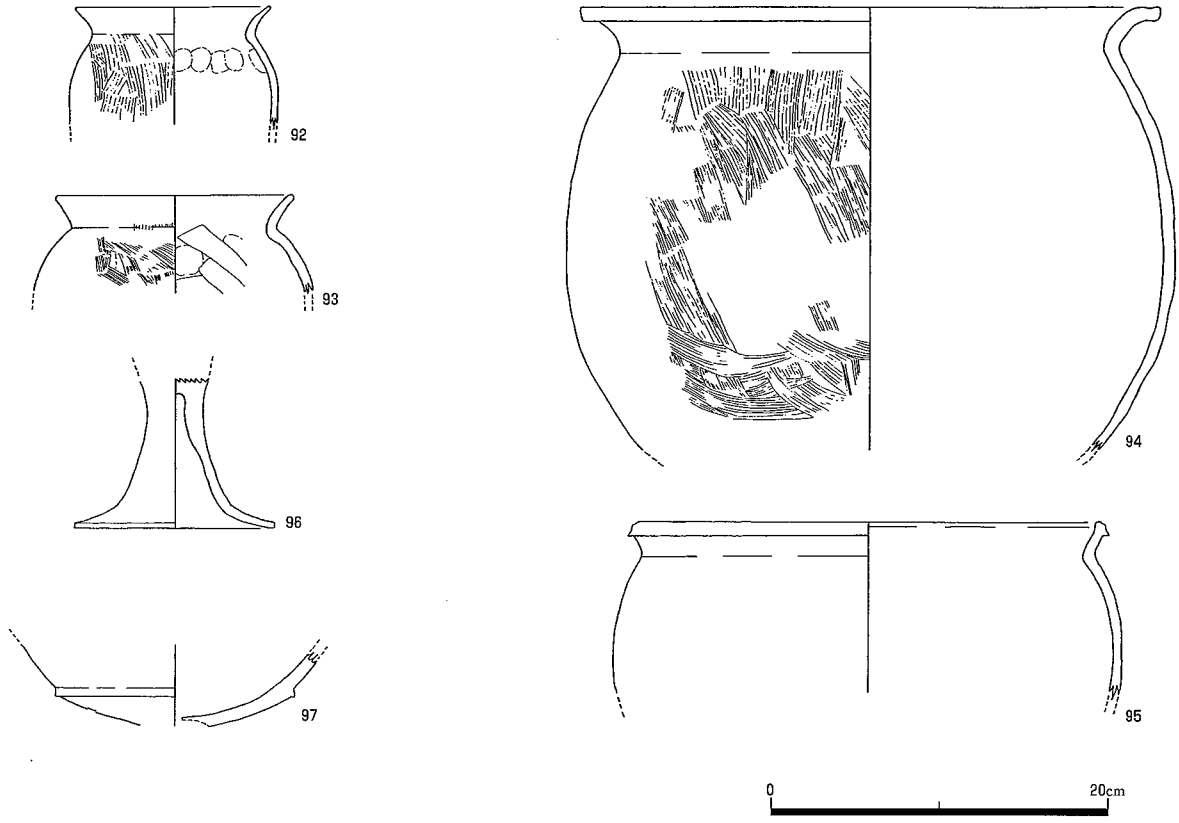


図16　西調査区出土遺物

第6章　調査のまとめ

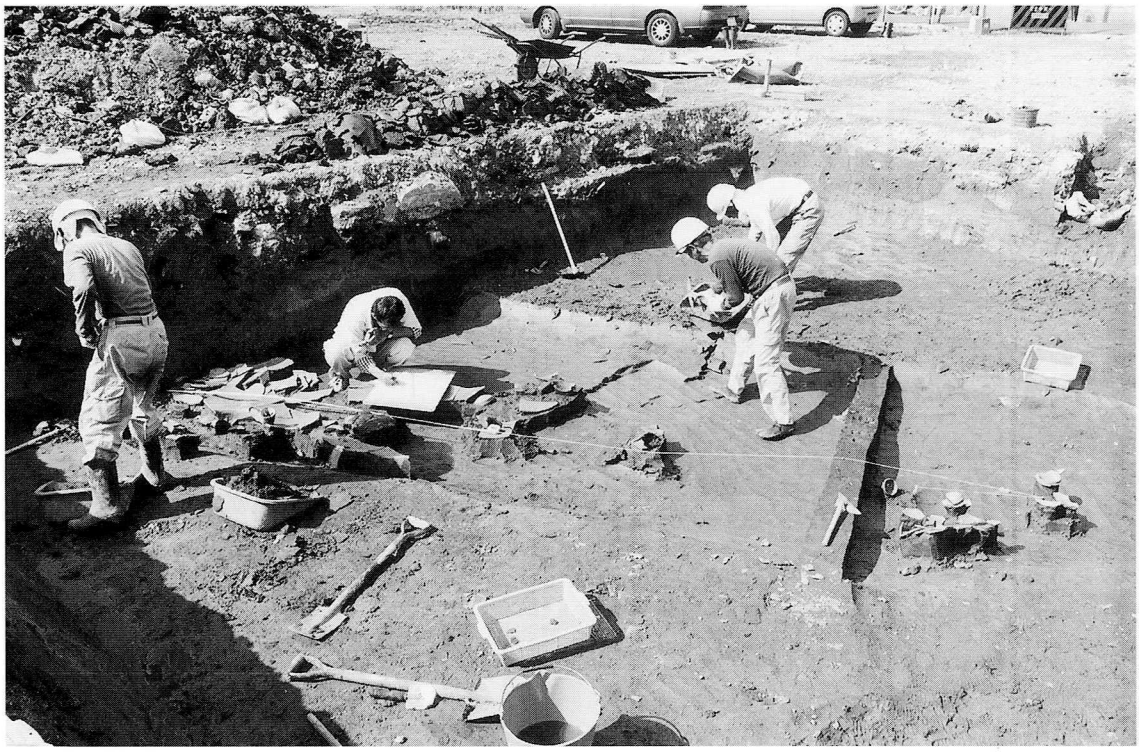
今回の調査は、調査面積が全体で約180㎡と決して広い面積を調査したわけではないが、調査の成果については多大なものがあった。

これまで門真市域で古墳時代の遺構といえるものは、茨田堤と普賢寺古墳の二カ所が知られるのみであった。しかし、いずれもが築造に大規模な土木工事を伴い、大勢の労働力を要するものであるから、当然、同時期の集落も存在するものと考えられてきた。

今回調査の元町遺跡は、市内で初めて発見された古墳時代の掘立柱建物跡を伴う集落跡である。発見された建物跡は一棟のみであったが、周辺に広がっていることは間違いないと思われる。また出土遺物の内容をみても、元町遺跡が古墳時代のある程度の規模の集落であることは容易に予測できる。

古墳時代の門真の資料は、発掘調査によりここ数年で飛躍的に増加し、当時の状況が少しではあるがようやく見え始めてきたといえる。

図　　版



図版1　調査地周辺

元町遺跡周辺（北東方向）

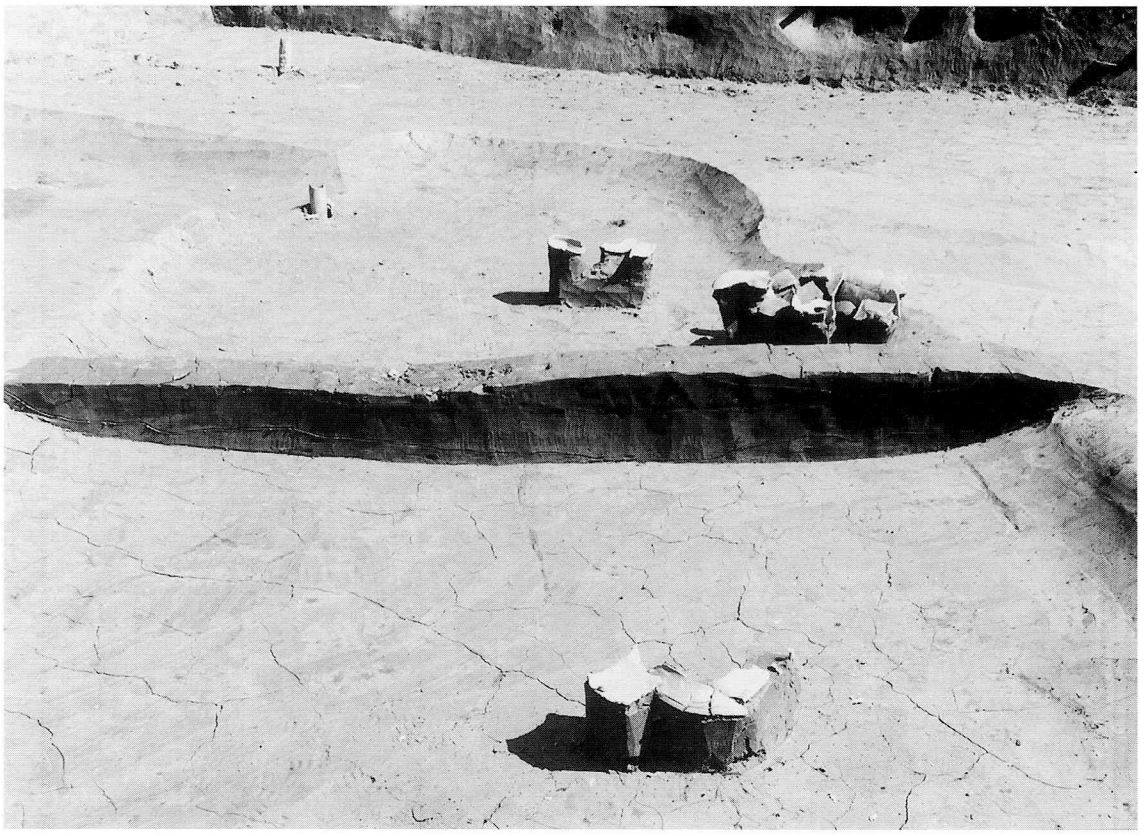
元町遺跡周辺（北西方向）

図版2　中央調査区全景（北から）

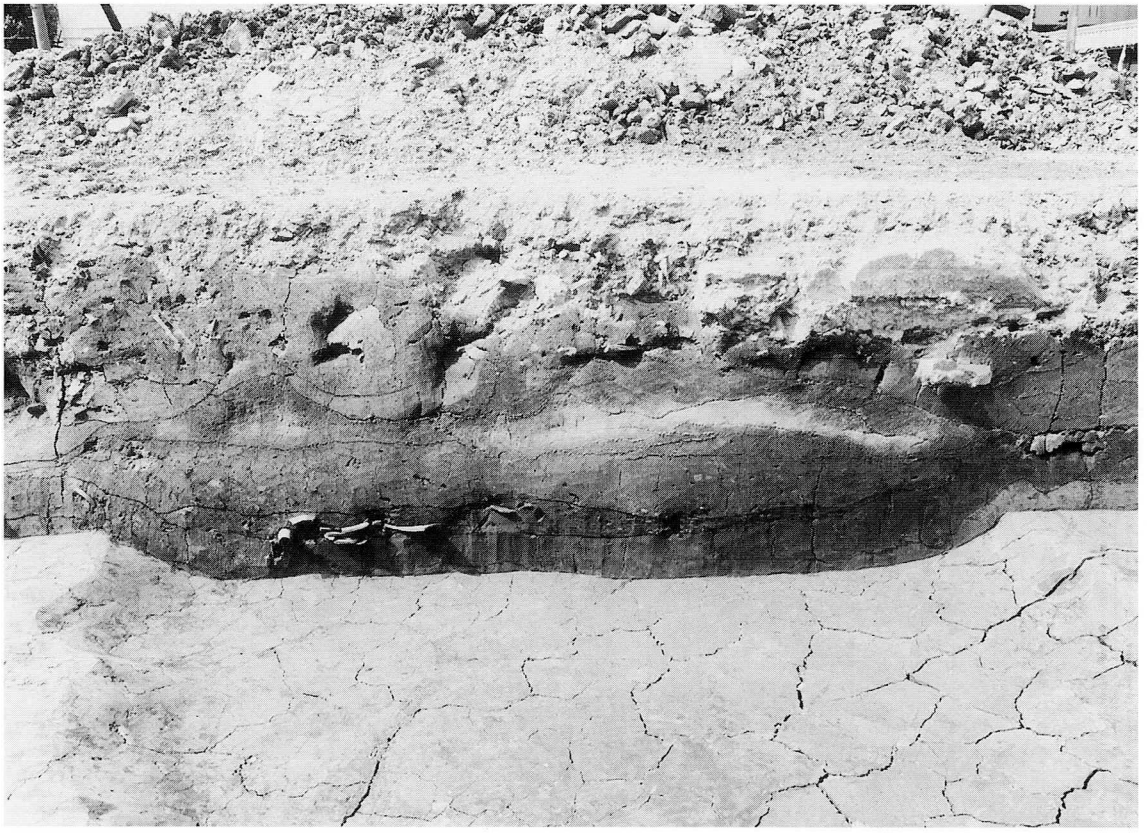
建物1検出状況（西から）

建物1完掘状況（南西から）

図版4　中央調査区土坑1

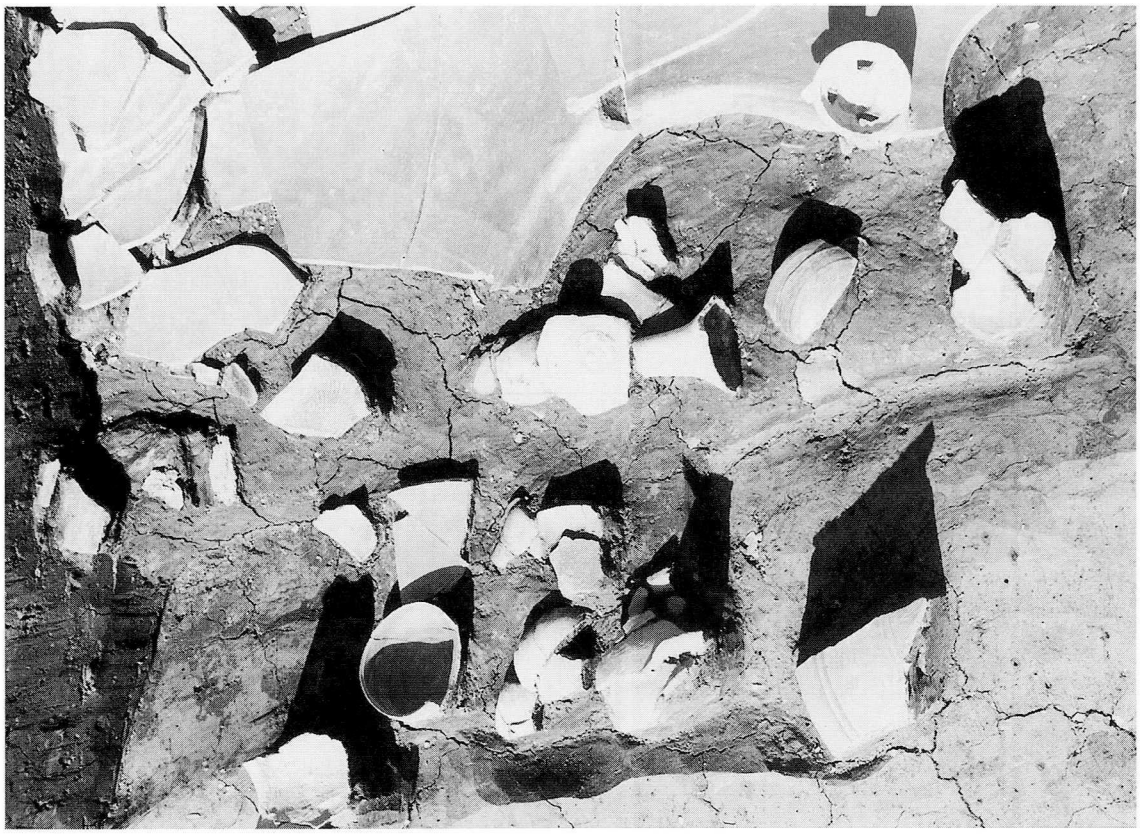


土坑1セクションベルト（西から）

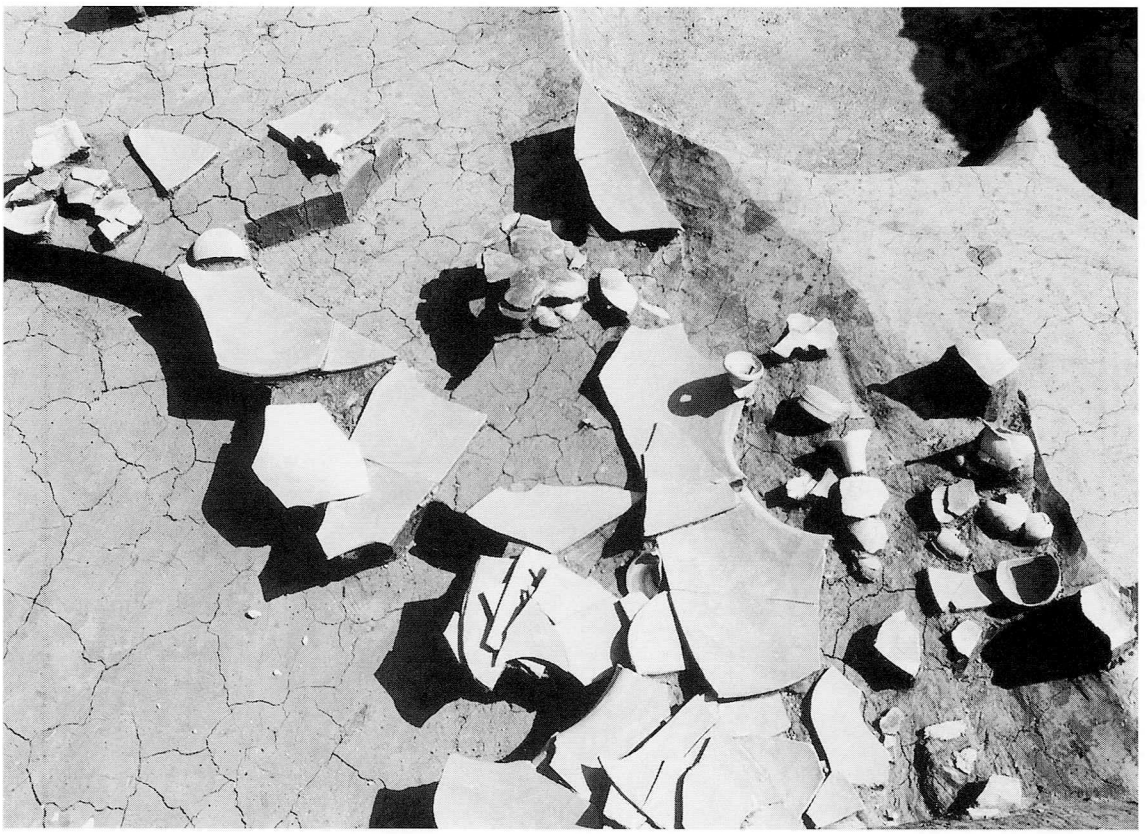


土坑1（西壁）

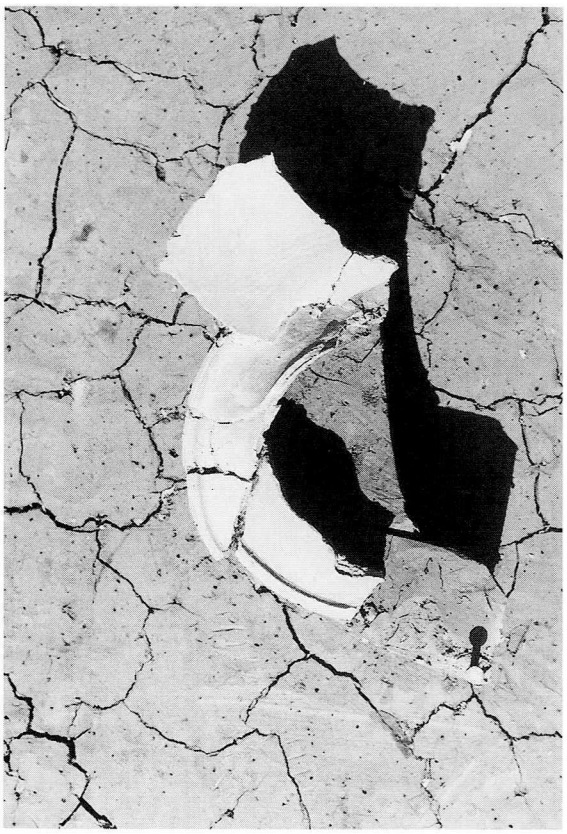
図版5　中央調査区土坑1遺物出土状況(1)



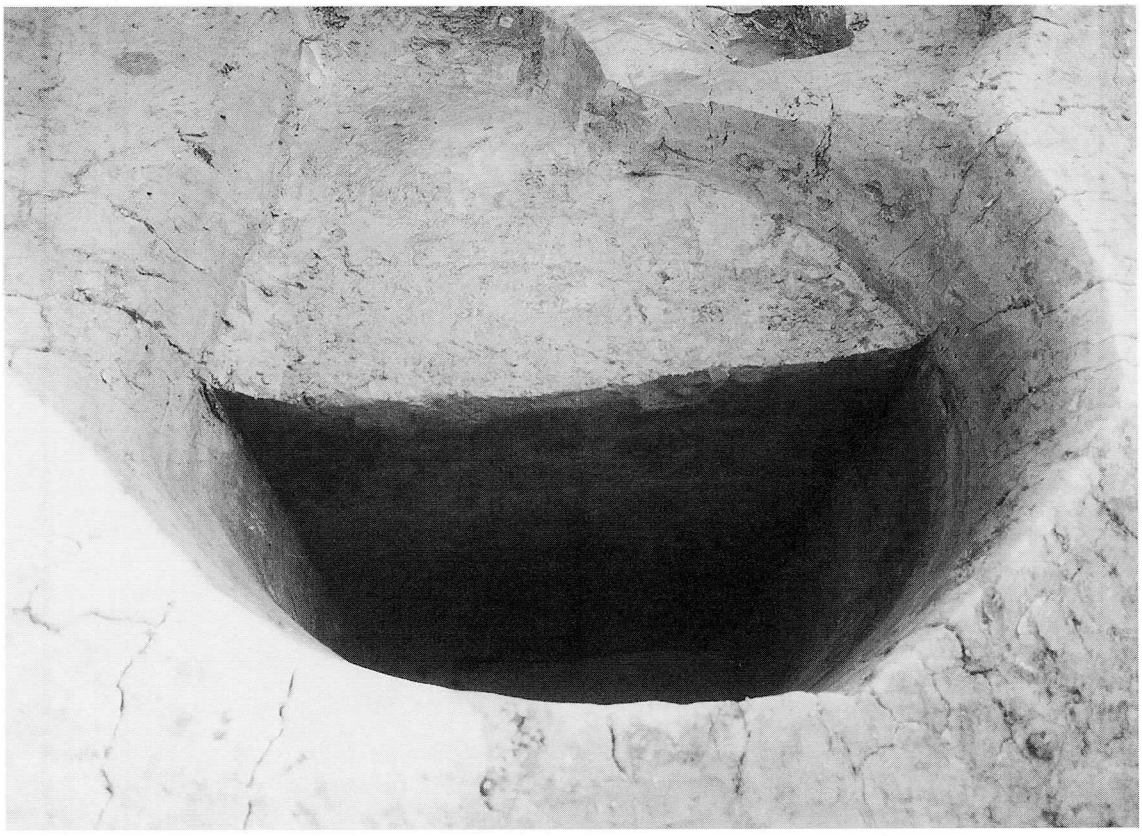
図版6　中央調査区土坑1遺物出土状況(2)



図版7　中央調査区土坑1遺物出土状況(3)



柱穴2　礎板検出状況



井戸1　完掘状況

図版9　中央調査区完掘状況（南から）

図版10　西調査区西1・2区

西1・2区完掘状況（南から）

西1区（西壁）

図版11　西調査区西3区

西3区完掘状況（東から）

西3区（南壁）

図版12　西調査区西2・3区遺物出土状況

西2区遺物出土状況

西3区遺物出土状況

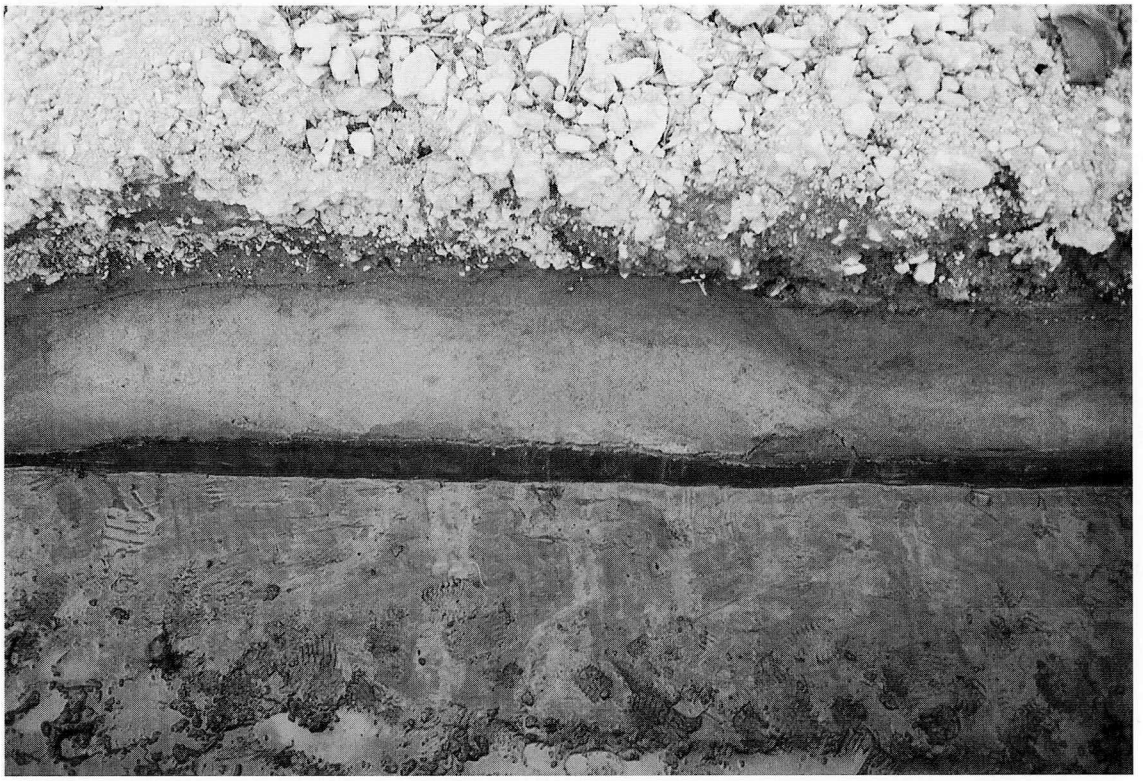
図版13　東調査区東1区

東1区完掘状況（南から）

東1区（東壁）

図版14　東調査区東2区

東2区完掘状況（南から）



東2区（東壁）

東3区完掘状況（西から）

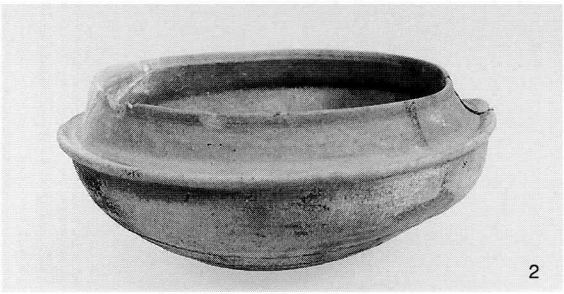
東4区完掘状況（北から）

図版15　東調査区東3・4区完掘状況

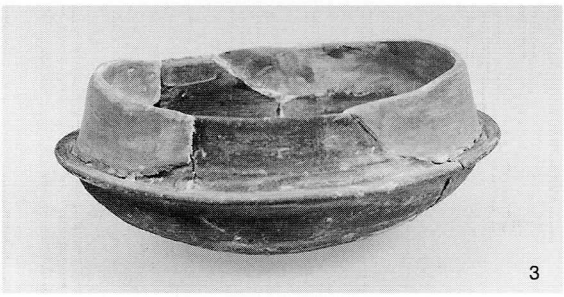
図版16　中央調査区出土遺物(1)

1

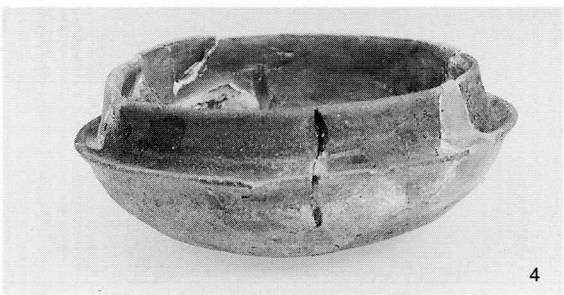
7

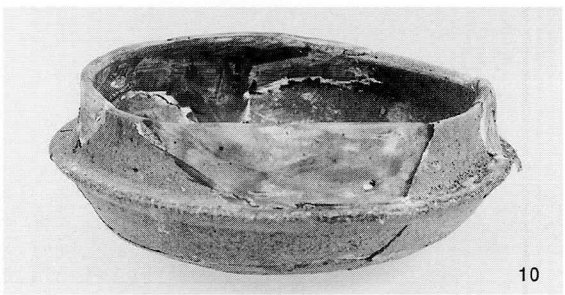

2

8


3

9


4


10

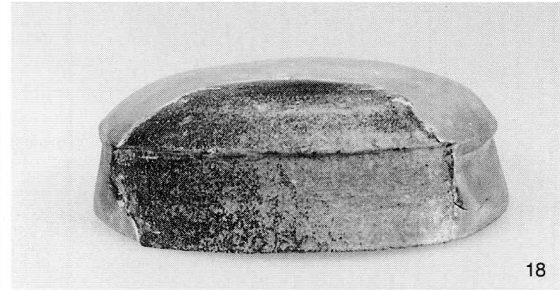
5

11

6

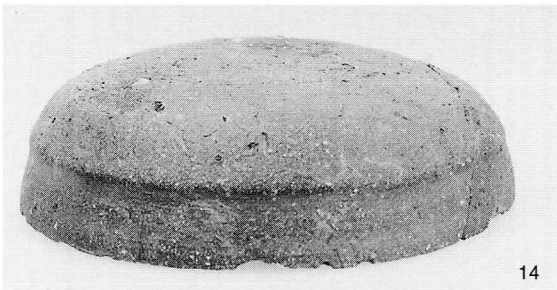
図版17　中央調査区出土遺物(2)

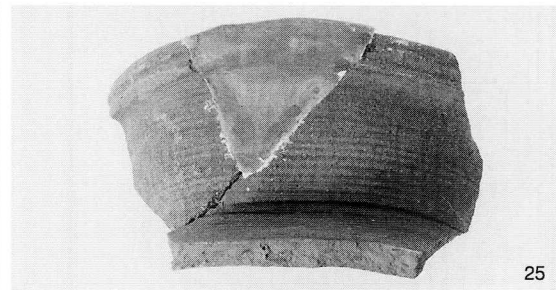
12


18

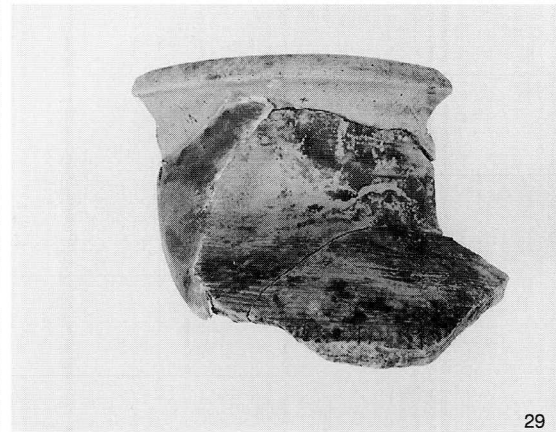
13

19


14

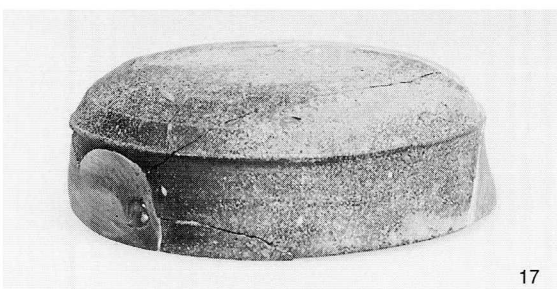

25

15

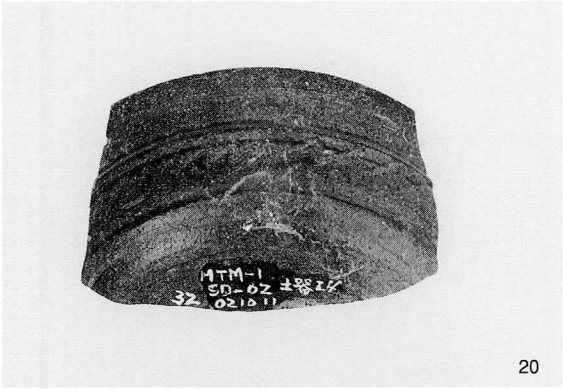

29

16

26


17

図版18　中央調査区出土遺物(3)



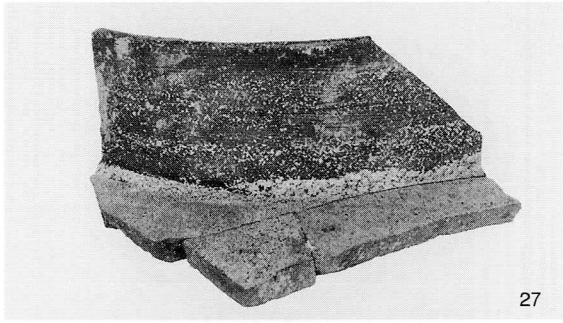
20

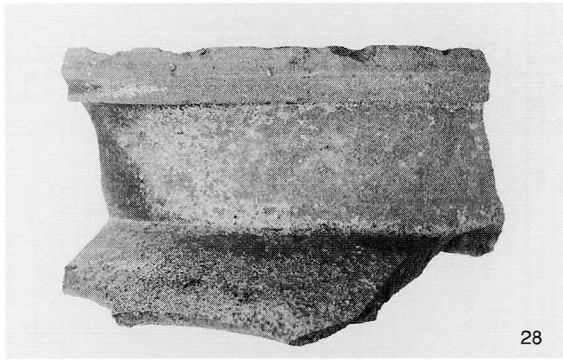
21

22

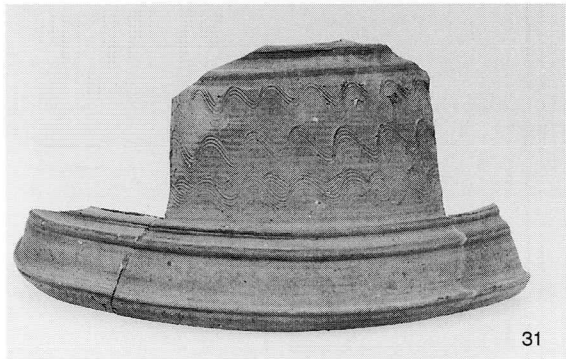
24

23

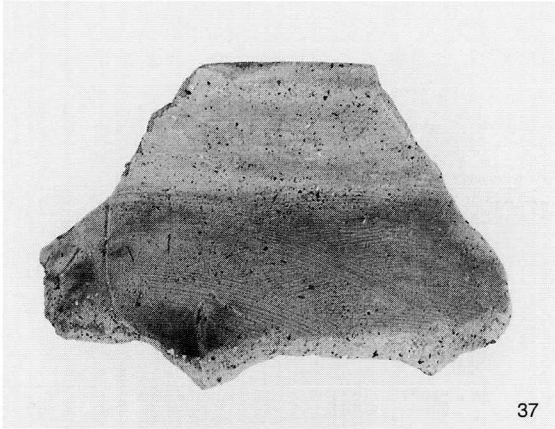

27


28

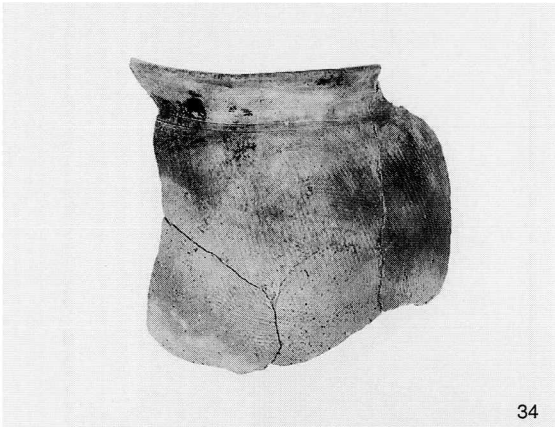
30

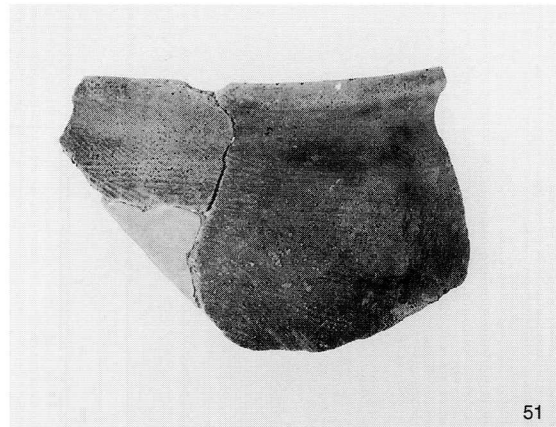

31

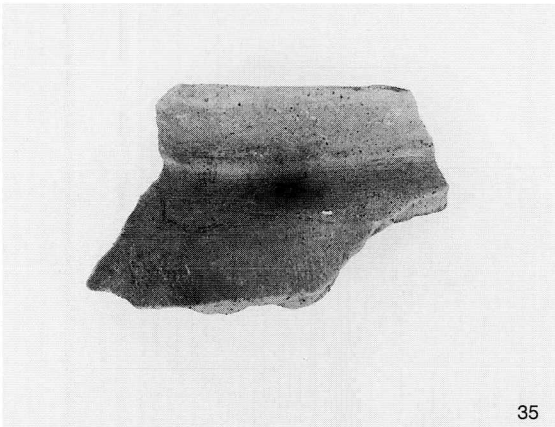
図版19　中央調査区出土遺物(4)

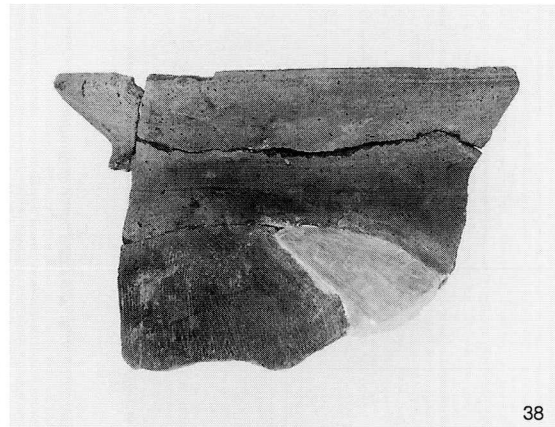

37

36

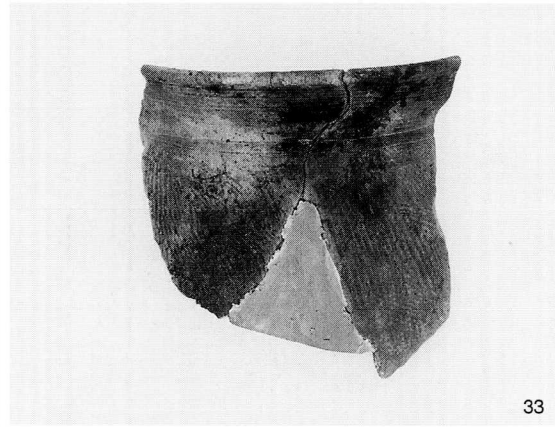

34


51


35


38

43


33

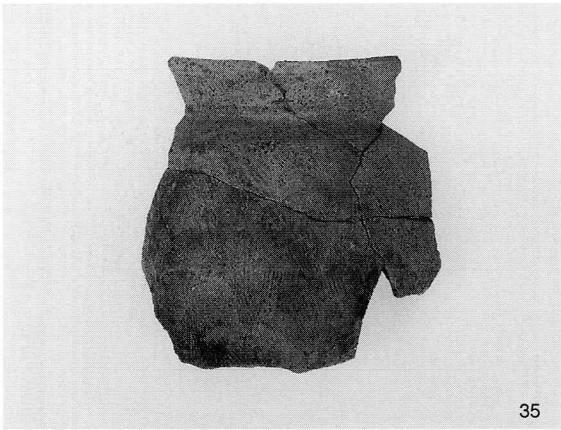
図版20　中央調査区出土遺物(5)

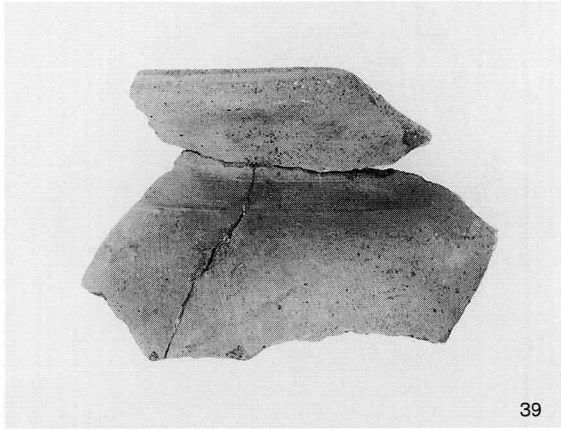
45

46

47

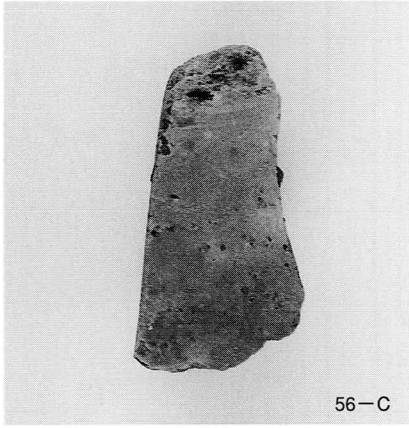
42


35

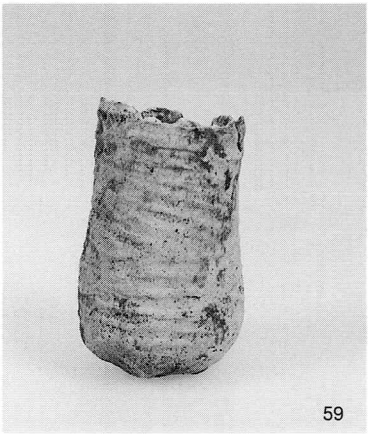

39

56－A

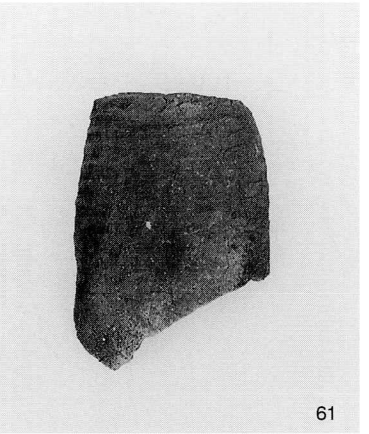
56－B


56－C

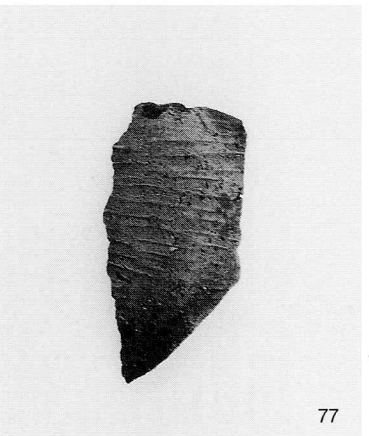
図版21　中央調査区出土遺物(6)


59

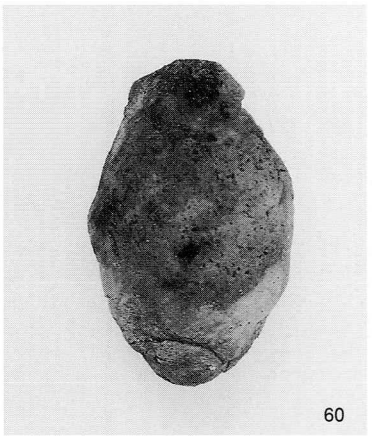
62

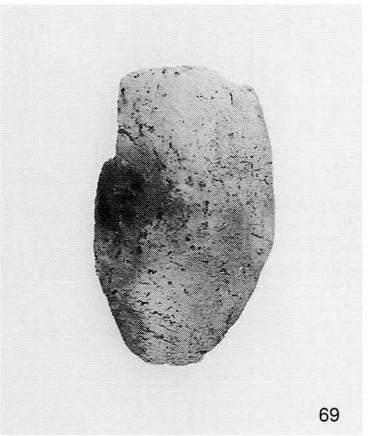

61

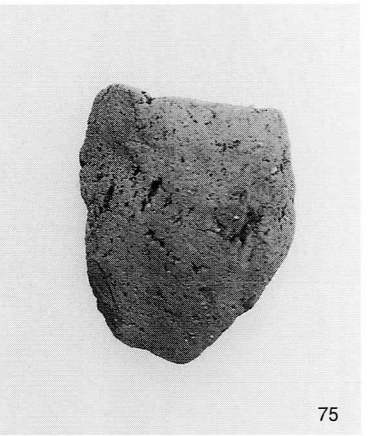
65


77

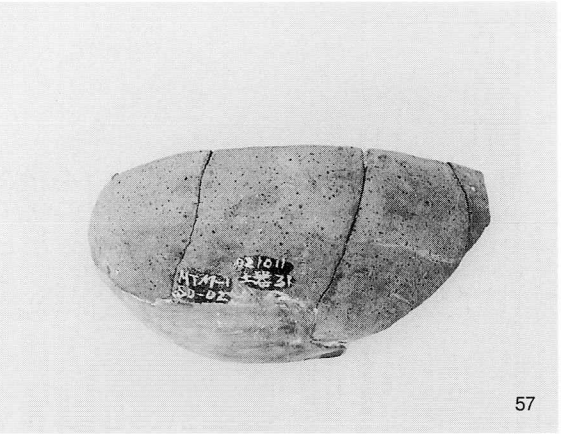
63


60

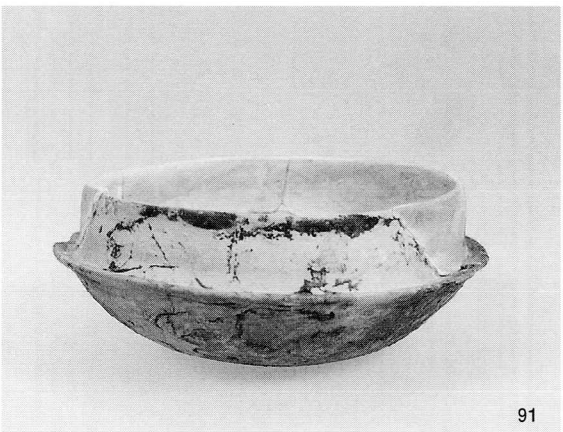

69


75

48


57

図版22　東・西調査区出土遺物


91

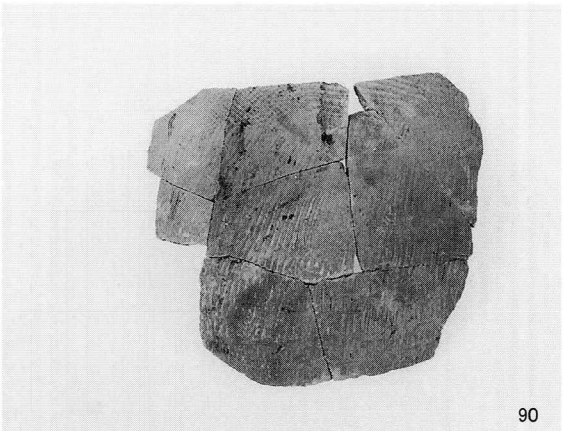
81

82

83

84

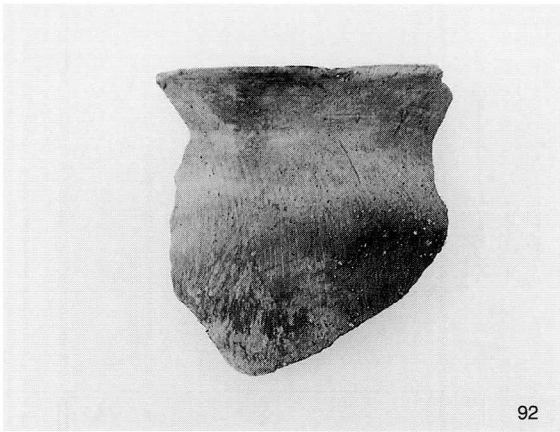
88


90

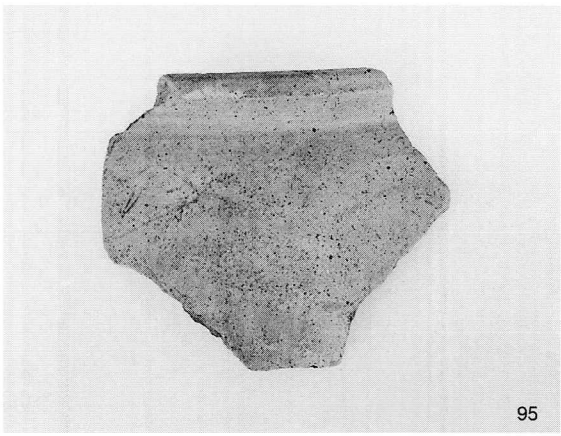
85

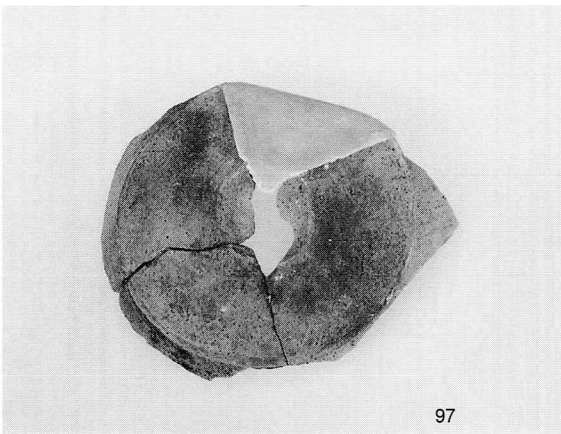
図版23　西・中央調査区出土遺物

96


92

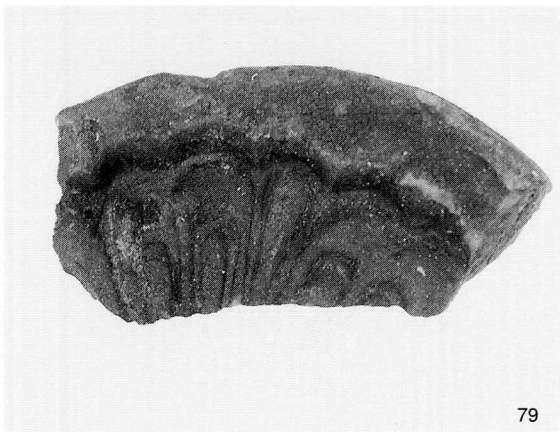
94


95


97

93

80


79

報　告　書　抄　録

ふりがな	もとまちいせき
書名	元町遺跡
副書名	元町中央公園整備事業に伴う発掘調査報告書
巻次	門真市埋蔵文化財発掘調査報告書 第８集
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宇治原靖泰・船築紀子
編集機関	門真市教育委員会
所在地	〒571-0055 大阪府門真市中町1-30 TEL 06-6902-1231
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとまちいせき 元町遺跡	おおさかふかどましもとまち 大阪府門真市元町 1135番地	27223		34°44′03″	135°34′05″	2002.10.2 ～ 2002.10.23	180	元町中央公園整備事業による

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元町遺跡	集落	古墳時代	掘立柱建物・土坑	須恵器・土師器・製塩土器	門真市で初めて発見された古墳時代集落跡

元町遺跡 元町中央公園整備事業に伴う
発掘調査報告書
2003年3月31日　発行

編集発行／門真市教育委員会
〒571-0055 大阪府門真市中町1-30
(TEL) 06-6902-1231
印　　刷／株式会社 ぎょうせい 関西支社
〒530-8688 大阪市北区天満2-7-17